再臨のキリストによる
第8(17)福音書
エピファニー
―宗教と科学の和声による公現―

III

THE GOSPEL
BY CHRIST OF
THE SECOND COMING No.8 (17)
EPIPHANY

SEIDOU 正道

目次

第２部　エピファニー
第８福音書 2
全体の目次 3

第６章　エピファニー（ 公現 ）
（ １ ）星による神の公現 6
（ ２ ）2017 年 8 月 17 日の徴 9
（ ３ ）ノストラダムスの予言 12

第７章　数値化された神秘（ １ ）
（ １ ）17・トリスメギストス 16
（ ２ ）イエス・キリストの数値 20

第８章　数値化された神秘（ ２ ）
（ １ ）聖母マリアの奇跡 24
（ ２ ）超新星・トリスメギストス 27

第９章　一致の補正
（ １ ）K・T 先生との出会い 32
（ ２ ）謎めいた予言 35
（ ３ ）予言の解釈 36

第 10 章　科学への福音
（ １ ）科学の進歩 42
（ ２ ）教会の反発 45
（ ３ ）宗教と科学の和声 48
（ ４ ）科学への福音 51

第 11 章　有神の宇宙
（ １ ）客観性を得た共時性現象 56
（ ２ ）神の計画の実現 58

第 12 章　幸福なマルス
（ １ ）忍び寄る無神論 64
（ ２ ）無神論の危険性 67

（３）聖戦の呼びかけ 71

第２部　エピファニー

第８福音書

再臨のキリストによる
第８（ 17 ）福音書

エピファニー

――宗教と科学の和声による公現

第２部　エピファニー（ 公現 ）

人々がもはや真理について語らないとき、真理は自ら人々に語りかけなければならない。この真理というのは神様といってもいい。であるから、無神論が進むと奇跡が起こらなければならないのである。

渡部昇一『パスカル「瞑想録」に学ぶ生き方の研究』より

１＋７＝８は、イエスの数である。

久保有政『ゲマトリア数秘術』より

全体の目次

第８（１７）福音書
エピファニー

序説　シンクロニシティ

第１章
因果律と共時性
第２章
共時性とは何か
第３章
共時性の実例（　１　）
――ルベドまでの道程
第４章
共時性の実例（　２　）
――超新星からの道程

第１部　エピデミア

第１章
中性子星の合体
第２章
重力波の観測
第３章
黄金の生成の謎
第４章
物質界における神
第５章
エピデミア（到来）

第２部　エピファニー

第６章

エピファニー（ 公現 ）
第 7 章
数値化された神秘（ 1 ）
第 8 章
数値化された神秘（ 2 ）
第 9 章
一致の補正
第 10 章
科学への福音
第 11 章
有神の宇宙
第 12 章
幸福なマルス

第６章　エピファニー（ 公現 ）

（ １ ）星による神の公現

謎の開示

GW170817 が現れることによって、これまで謎だったことが突然明白に開示された。

すなわち、どうして「ダニエル書」は、2017 年を指定したのか？　どうしてノストラダムスは、4 月ではなく、8 月を指定したのか？　どうしてイエスと私とは、同じ 17 日に生まれたのか？　それが、すべて明らかになったのである。

そう、私はどうしても 8 月 17 日に生まれなければならなかったし、2017 年に、世に現れなければならなかった。それらの事柄は「星による神の公現」が起こるためにこそ、必要なことだったのだ。それについて話していくことにしよう。

バル・コクバ (星の子)

さて、キリスト教的な救世主には、いくつかの称号がある。尊敬的なあだ名とでも言うべきだろうが「こう呼ばれるならば、彼は救世主であろう」というような称号があるのである。

起源が古いものとしては、ダビデの鍵を持つ者（ イザヤ ）、ユダ族から出た獅子（ 創世記、エゼキエル ）、ダビデのひこばえ（ イザヤ ）、などがある。

そのような古い称号の一つに「バル・コクバ」がある。

バルは息子を意味する言葉で、たとえばシモンの息子ならば、バル・シモンになる。コクバは星を表す言葉なので、バル・コクバは「星の息子」「星の子」ということになるだろう。つまり救世主は、その一面において「星の子」なのである。

これは、もともと旧約聖書の『民数記』に由来する考え方である。そこにはメソポタミア出身の預言者にして、イスラエルの協力者となったバラムの言葉が記されている。バラムはヤハウェ（ 神 ）の霊に満たされて次のように預言する。

――〔ヤハウェの使いである〕バラムの言葉。目の澄んだ者の言葉。神の仰せを聞き、いと高き神の知識を持ち、全能者のお与えになる幻を見る者。倒れ伏し、目を開かれている者の言葉。

わたしには彼が見える。しかし今はいない。彼を仰いでいる。しかし、間近にではない。

ひとつの星がヤコブから進み出る。ひとつの笏がイスラエルから立ち上がり（ 中略 ）イスラエルは力を示す。ヤコブから支配する者が出て、残ったものを町から絶やす――

ヤコブとは、国として見ればイスラエルのことである。そのイスラエルから「星」が現れ、異民族を打ち倒すというのだ。ここから「星の子」「バル・コクバ」という救世主の称号が生まれることになった。

かつて、実際にこの「バル・コクバ」の称号を与えられた有名な人物もいた。第二次ユダヤ戦争（ A.D,132 年 ）の指導者となった、シモン・ベン・コスィバという人物である。

つまり当時、メシアであり救世主であるバル・コクバ（ ＝シモン・ベン・コスィバ ）が、敵であるローマ軍を打ち倒そうとしたのである。それゆえ第二次ユダヤ戦争は「バル・コクバの乱」とも呼ばれる。

とはいえ、一時的な勝利こそ収めたものの、シモン率いるユダヤ軍は、結局はローマ軍の前に敗れ去った。そのためシモンは、同胞であるユダヤ人から「バル・コゼバ」と揶揄されることになる。これは「欺瞞の子」という意味である。

星の子としてのイエス

イエスもまた、「バル・コクバ」「星の子」として扱われることがある。彼こそ真なる救世主なのだから、そのような称号を与えられるのは、当然といえば当然であろう。エピファニーについて書かれた文章において、それが明らかである。

エピファニーは 1 月 6 日に祝われるキリスト教の聖日で、日本語では「公現日」「現異邦日」などと訳される。キリストの神性が異邦人（ 東方三博士たち、あるいは、アラビア人、ペルシア人、インド人 ）に対して、公にされたことを記念している。

とはいえ本来的には「すべての人種、すべての人間に、キリストの神性が公にされた」と言いたいのであろう。

なお、エピファニーは英語、後出のエピパニアはギリシア語、またはラテン語である。いずれも「キリストが公の場に現れたこと」を意味する言葉である。

ヤコブ・デ・ウォラギネは『黄金伝説』の「主のご公現」で次のように語る。

――イエスのご誕生後十三日目に、東方の三人の博士たちは、星にみちびかれて、主のもとに訪ねてきた。だから、この日は〈上に〉を意味する epi と〈出現〉を意味する phanos とからなる　Epiphania（ エピパニア、公現祭、顕現日 ）という名称をもつのである。なぜなら、上から星が出現したからである、あるいは、上に出現した星によってキリストそのものが真の神であることが東方の三博士に啓示されたからである――

一応注意書きしておくと「イエスの誕生後十三日」という日数は、福音書の記述に依拠していない。これは単なるカトリック教会の創作的ドグマ（ 教義 ）である。

――東方の三博士は、バラーム（ バラム ）とおなじ種族の出であり、だから星にしたがったのである。彼らの祖先が「ひとつの星がヤコブから出、ひとりの王がイスラエルから起こる」と託宣していたからである。

ここでアウグスティヌスが、声をあげる。「おお、きら星を臣従させているおさな子よ、あなたはどうしてこんなに高い、きらやかな崇敬を受けておられるのですか。（ 中略 ）

知恵をきわめた博士たちは、あなたのまえにひざまずいております。

おお、しあわせな小屋よ、天につぐ神の御座よ、ここに輝いているのは、灯火ではなく、星なのです。

けだかい宮殿よ、ここに住んでおられるのは、宝石をちりばめた王ではなく、人となられた神です。この神は、やわらかいしとねではなく、固いかいば桶のなかにおられます。黄金の蓑の下ではなく、すすけた藁屋根にやすんでおられます。

しかし、このおさな子のうえには、まめやかに仕える星が輝いています。（ 後略。また、改行を増やした ）――

ヤコブ・デ・ウォラギネ『黄金伝説』前田敬作、今村孝訳より

（ ２ ）2017 年 8 月 17 日の徴

私のための星

すでに読者もご存じのように、私の身にも、自分自身を「星の子」と呼びたくなるような出来事が起きた。

すでに 2013 年 4 月 16 日の夜に、超新星という「霊力の塊」を受けとめた私ではある。だがそれは、結局「イエスの星」を借り受けたものだったような気がする。

つまりそれは、イエスの降誕をなぞるために設定された「イエスの星」の拝受であって、決して「正道のための星」の拝受ではなかった気がするのである。

というのは、4 月 17 日は、あくまで「イエスの誕生日」であって、4 月 16 日の夜は「イエスの誕生日」のクリスマス・イブ（ 降誕日の夜 ）だからである。

それはイスラエル人のイエスにとっては「17 日の夜」であるが、日本人である私にとっては「16 日の夜」である。つまり、それはイエスの都合に合わせることで、はじめて「17」の神秘数が導かれる日なのである。

これに対して、私の誕生日は 8 月 17 日である。17 日はイエスと一緒であるが、生まれた月は 4 月ではなく 8 月なのだ。オクトーブルの月の 17 日なのだ。あくまでも 8 月 17 日なのだ。

ならば、この日に星が与えられてこそ、私は「星の子」になれるのではないだろうか。星の子、バル・コクバという称号を持った救世主となれるのではないだろうか。

宇宙そのものの振動

そして、その日に、実際に星は降臨したのである。ダニエルによって予言された運命の年、すなわち 2017 年、の 8 月 17 日に。

それは午前 8 時 41 分の到達だった。だから、それが夜（ イブ ）であることや、16 日の夜であることは必要ではない。ごくシンプルに、8 月 17 日のことである。

だが、どうして夜でもないのに「星が到達したこと」が分かったのだろう？　どう考えてみても、星の輝きが見られるのは夜だけなのに。

すでに答えは明らかであるが、改めてお答えしよう。それは、この「星の到達」を観測したのが、普通の望遠鏡ではなく、重力波観測器（ 重力波望遠鏡 ）だったからである。

重力波観測器は、宇宙（ 時空 ）そのものの揺らぎを観測する装置である。

したがって、そのとき観測されたのは、星の輝きではなく、地球を含んだ「宇宙そのものの揺らぎ」だったのである。まさしく観測器は、その揺らぎが地球の地表に到達した瞬間を捉えた。

そして、ここで言う「星」というのも、もはや単なる星とは呼べないほど、巨大な星辰現象だった。それは二つの、極めて特殊な星（ 中性子星 ）が合体するという現象だったのである。そのときの凄まじい衝撃が、重力波として地球まで届いたのだった。

星は空から落ち、
天体は揺り動かされる。
そのとき、人の子の徴が天に現れる。

という『マタイによる福音書』にある言葉どおりに、この星辰現象の重力波は、地球に到達した時に、地球という天体を揺り動かした。
そして、それによって、人の子――人の子となった神（ 救世主 ）――の存在を、「バル・コクバ」「星の子」として、世界に公現させたのである。
そうした役割をもった星（ 星辰現象 ）として、GW170817 は到来したのである。

宇宙そのものの振動

GW170817――GW とは重力波のことであり、170817 はその観測日、2017 年 8 月 17 日のことである。
重力波は宇宙（ 時空 ）そのものの振動であるが、GW170817 の場合、その振動が生まれたのは、今から 1 億 3000 万年前のことだった。そのとき宇宙そのものが震えるほどの振動が生まれ、それが 1 億 3000 万年経っても消えなかった訳である。
そしてこの振動が、2017 年の 8 月 17 日に、この地球まで届いたことになる。
しかし、GW170817 が重要なのは、その衝撃の大きさによってではない。むしろ GW170817 は、それが教えてくれた「内容」によって重要なのである。

黄金という神の象徴

何よりも、GW170817 は、その「星の合体」によって、驚くべき量の黄金をつくり出した。それは金を含む貴金属を、地球 1 万個分も生みだしたのである。
しかも、そもそも金がどのように生成されるかは、現代科学をもってしても分かっていなかった。それがこの GW170817 の観測によって、はじめて人類の前に明らかになったのである。
つまり GW170817 は、金の生成メカニズムを人類に教え、かつまた実際にも黄金をつくり出したのである。人類がとても抱えきれないほどにも。
なにしろ地球そのものよりも、はるかに大きな質量の金が生成されたのだ。そうであるならば、これを人類が抱えられるはずがない。
そしてこれは、物質的な象徴として描かれた「神の出現」と言えることである。なぜなら錬金術の象徴において「神」と「金」は同じもののペルソナ（ 位格 ）だからである。

つまり象徴的に見れば「金の出現」と「神の出現」は同義なのである。

天に現れた人の子の徴

この「金＝神」の出現が「170817」、あるいは「2017 年 8 月 17 日」という定数によって、この私という人間に接着される。星辰現象による「黄金としての神の出現」が私という人間に結ばれるのである。そして、ここで「神＝人間」「人の子となった神」という新たな象徴が、私のもとに出現する。

これこそまさに、マタイの言う「そのとき、人の子の徴が天に現れる」ということであろう。

つまり 2017 年 8 月 17 日に、キリスト（ ＝人の子となった神 ）の徴が、星辰的な現象として天空に現れたのである。これこそ私が「再臨のキリスト」であることの何よりの証拠ではあるまいか。

そして、GW170817 は宇宙規模の星辰現象であり、限られた民族や、限られた国に与えられたものではない。

いや、民族で区切らなくとも、もしその星が「見える星」であるならば、そこに「見た者」と「見なかった者」の差異が生まれただろう。しかし、GW170817 は、重力波という波動である。時空の揺らぎであり、時空の震えである。

つまりそれは、アラビア人、ペルシア人、インド人どころではなく、見た者も見なかった者もなく、とにかく「すべての人類」を震わせたのである。

なにせ地球全体が、重力波によって伸び縮みしたのだからである。つまり地球のすべてが、GW170817 という現象を共有したのである。

したがって、それはかなり文字通りの意味で「公のもの」であり、「公的な現れ」である。それゆえ、これを現代におけるエピファニー（ 救世主の公現 ）と呼ぶことは極めて正当であろう。

（ ３ ）ノストラダムスの予言

純粋なブロンドのきらめき

ノストラダムスの予言詩に次のようなものがある。

――日の国はメルキュールによってエクリプスをかくす。第二の空にしか置かれない。
火と金属の神により、エルメスは祈らされる。日の国は純粋なきらめきとブロンドを見るだろう――

五島勉『ノストラダムスの大予言　スペシャル日本編』より

これを、五島勉氏に依拠しつつも、私なりに解釈し直すと、次のような内容になる。

日本は高度技術（ メルキュール ）によって、日蝕（ エクリプス ）のごとき「国際的な地位低下」に歯止めをかける。
しかし、アメリカと中国の影に隠れて、日本は第二等国の位置づけに満足するしかない。
そのような時代において、ギリシアの神ヘルメス（ エルメス ）は、ヘルメス・トリスメギストスとして――錬金術（ 火と金属の術 ）の神として――その宗教性を用いられることになる。
そのような「宗教としての錬金術」により、日本において、キロノヴァの純粋なきらめきと、黄金（ ブロンド ）の生成が報告されるだろう。

ノストラダムスは、その予知的幻視によって、おそらくは、GW170817 と、星の錬金術師による、金の創造を見ていたのである。
三行目の「火と金属の神」は、『ノストラダムスの大予言　地獄編』では「ヴュルカン」と訳されている。ギリシア読みでは「ヘパイストス」となるこの神は、まさしく錬金術師たちにとっての “我らが神” に他ならなかった。
そして「純粋なきらめき」とは、一切の手垢が付いていない、無から生まれたばかりの、黄金の輝きを謳ったものであろう。そして、それらが最終的に意味するところは、再臨のキリストのエピファニー（ 公の顕現 ）であった。

ノストラダムス讃

思えば、私の生誕を予言したのもノストラダムスだった。

序説でも触れたとおり、70 と 3 の年、オクトーブルの月（ 8 月 ）という定数から、私の「共時性現象の羅列」とも言うべき人生が始まったのである。

そしてノストラダムスは、火と金属、ヘルメス、黄金、といった言葉によって、「錬金術的見地から見た黄金の生成＝神の公現」というゴールも示してくれた。すなわち「エピファニー」というゴールである。

きっと、私の人生の中で、もっとも価値のある「現在」が、2017 年 8 月 17 日だったのだ。イエスが、自身が十字架にかかる日のことを「私のとき」と呼んだように、私にとっては、2017 年 8 月 17 日が「私のとき」だった。

過去はその「私のとき」に到達するように、遡って編まれていた。未来もまた、その「私のとき」を基点にして伸びていくのだ。よって、このエピファニーは、いくらでも重要視してよいだろう。実際、これほど明晰で巨大な奇跡も珍しい。

もちろん、この共時性現象を「キリストの再臨の証」として受け入れるかどうかは読者次第である。だが少なくとも、私は本書において、事実以外のことは書かなかった。

私の生年月日も、超新星の降臨日時も、GW170817 も、捏造したものでは全くない。それは、残されたデータから、いくらでも証明できることである。

ノストラダムスとは何者か

本章の終わりに、ノストラダムスという予言者が、歴史的に見て何者であったかについて明確にしておきたい。

わたくし正道は「ユダヤ - キリスト教」の壮大な宗教史の “末尾” に位置している。そんな私にとって、ミシェル・ノストラダムスという存在の重さは計り知れない。その理由が以下に掲げる文章に、明瞭に現れている。

――旧約聖書に出てくるイザヤ・エレミヤ・ゼパニア・ゼカリア……。みんな終わりの前、イスラエル人が故郷に帰って国を建てること、そのあと大戦と大異変が起こって世界が滅びることを告げている。ニュアンスはそれぞれちがうが、大筋でノストラダムスに近い。

こうして答えが出る。ノストラダムスとは何者だったか、という長い疑問に、右の事実が答えるだろう。

彼は孤立した予言者ではなかったのだ。なんの背景も基盤もないところへ、突然ポッと現れたのではなかった。

彼のずっと前に、先輩の予言者たちの長い系列があった。それが旧約聖書の予言者たちだった。古代ユダヤのリーダーたちだった。それを受けついで、宗教として発展させたのがイエス・キリストだった。「黙示録」のヨハネだった。

さらに、それらを全部受けつぎ、宗教としてでなく、魔術的な予言として、具体的にくわしくまとめあげようとしたのがノストラダムスだったのだ――

五島勉『ノストラダムスの大予言Ⅱ』より

ノストラダムス最大のテーマ

なかでも、ノストラダムスにとっての最大のテーマが「キリストの再臨がいつか」「その再臨がどんな形をとるか」ということだった。16 世紀に、そんなノストラダムスに協力したという修道院がある。その修道院の後裔が、五島氏に次のように語った。

――16 世紀プロヴァンス修道院のわれわれの先輩たちは、彼らが保守していた最も重要なテーマと秘教の知識を〔ノストラダムスに〕提供しました。

それは結局、最も神聖な時期の秘密をどう解くか、というテーマでした。われらが主イエス・キリストが、いつ天から戻って来られるか、という神聖な時期の秘密を……

彼は解きました。主がいつまた来られるかという時期の秘密を。彼の予知力と修道院の協力で。そして彼はその時期の秘密の解答を書きました。彼のあのたぐいまれな予言書の中に――

五島勉『ノストラダムスの大予言　最終回答編』より抜粋

結果的には、そのノストラダムスの予言を、再臨のキリストが受け取り、これを自分の教説の支えとしたのである。そうであるとしたら、旧約の予言者たち、16 世紀の修道院、ノストラダムス自身、みなこの事を喜んでくれるに違いない。

なぜなら、今回のエピファニーは、まさに彼らの遺産を養分にして咲いた、大輪の花だからである。事実、彼らの遺産なしに「キリストの再臨の公現」が成立することは決してなかった。少なくとも、これほど見事な物語を綴ることは、決してなかったのである。

第７章　数値化された神秘（ １ ）

（ １ ）17・トリスメギストス

数値がもつ力

まずは序説の引用から始めよう。

共時性現象のレベルが極まれば、もはや主体内面という枠が撤去され、明白に「客観性」の領域まで、浸食することもあるだろう。それほどにも明確な “一致” もあるだろう、ということだ。

それは十全に、客観的に、人を納得させるほどの “一致” である。また、並存する複数者に「間違いなくつながりがある」と誰もが声を揃えるほどの一致性とも言える。

その場合、たとえば現代人が「数値」に高い関心を持っていることが、大いに役立つかもしれない。つまり明確な数値で、共時性現象の “一致” が規定されたとする。すると人々は、そこに「格別の実在性」を感じることになるのではないだろうか。

もともと自然数は、神的な性質を持っているように思われる。もしこれが事実そうなら、ある種の数や、数の組み合わせが、何らかの神性と関係を持つことになるだろう。神が数字に影響を与えるだけでなく、その逆もまた真になるだろう。

つまり数字が神性に影響を与えることもあるだろう。

この文章の大部分は、私自身の意見を述べたものである。しかし最後のところはユングの見解だ。すなわち太文字になっている部分である。

このような訳だから、ここでは「数値」を助けとしながら、あらためてエピファニーについて語りたい。まず話の糸口としては「トリスメギストス」について触れるのが相応しかろう。

Œ3 の偉大性

トリスメギストスとは「三倍も偉大なる」という意味のギリシア語である。そして、錬金術における伝説的な教祖が、まさしく「ヘルメス・トリスメギストス」と呼ばれている。これは「三倍も偉大なるヘルメス」という意味の名称である。

実例を挙げるならば、錬金術の根本経典と言ってもよい『エメラルド板』に、そのヘルメス・トリスメギストスという名前を見つけることが出来る。

中世ヨーロッパの伝説によると、この『エメラルド板』は、鷲に守られた、ピラミッド型の建物の中で発見されたものだという。しかし実際には、紀元前 3 世紀から、紀元後 3 世紀の間に、エジプトで書かれたものだろう。

そしてそこには、次のような言葉が記されている。
「われは世界霊魂の三部分を備えるがゆえに、ヘルメス・トリスメギストスと呼ばれる」
トリスメギストスとは、そのような使われ方をする言葉なのである。
ということは、トリスメギストスを、ごく単純に表せば、結局「Œ3」の偉大性ということになるだろう。今回のエピファニーには、不思議と、この「Œ3」の様相が、いくつか現れている。本節では、このことについて考察していきたい。

カバラ‐ゲマトリア

まず、三つの「17」について見ていこう。
GW170817 には、三つの「17」が含まれている。「17」「08」「17」の三つだ。
このように言えば、読者からは当然「08」は「17」ではないじゃないか、という反論が出るだろう。それは当然の反応に違いない。しかし、ユダヤ‐キリスト教のカバラの立場から見ると、確かに 8 と 17 は等価なのである。では、カバラとは何か。

――カバラとは、古いユダヤ語で “ひそかに伝えられ受けつがれたもの” という意味です。つまり、ユダヤの選ばれた家系の人たちが、先祖代々、秘法または秘教としてそっと伝えてきたものがカバラです――

五島勉『カバラの幸運術』より

このカバラの数秘術部門を「ゲマトリア」と言う。ゲマトリアでは、よく「大きな桁の数字を順番に足して、小さな数字に還元する」ということが行われている。
例を挙げると次のようなものがそうだ。

――「自分はいま〔終末的な〕7000 年紀にいる」と書いたノストラダムスが、おなじ『諸世紀』のまえがきの中で「この予言集には 3797 年までの絶えざる予言がおさめてある」などと、なぜ書いたのか。
3797 をほぐして足していけば、この謎はかんたんに解ける。3 ＋ 7 ＝ 10 → 1、1 ＋ 9 ＝ 10 → 1。そしてこの 1 と末尾の 7 を並べれば 17。
つまり、この 3797 は、ユダヤの数の考え方では「17」とおなじことになる。

「1999 年 7 の月」にも、この数の考え方をあてはめてみよう。すると 1 ＋ 9 ＝ 10 → 1、1 ＋ 9 ＝ 10 → 1、さらに 1 ＋ 9 ＝ 10 → 1 となる。つまり、1999 を単純化した数は 1 であり、これに「7 の月」をくっつければ「17」になる――

五島勉『ノストラダムスの大予言Ⅱ』より

それだから、これをもっと押し進めて、17 を「1 ＋ 7」と考えることも可能なのだ。そ

うすれば当然 8 が得られるのであり、ゆえに 17 と 8 は等価なのである。言い方を変えれば、「17」と「8」は、相互転換が可能だということである。

本書が「第 8（ 17 ）福音書」という奇妙なタイトルを採っているのも、もちろん「この二つの数字が、相互の転換を許容している」と考えているからなのだ。

17 月の不在

してみると、GW170817 は「GW171717」と捉えることも出来る。すなわち、三つの 17 が並ぶというわけだ。

そもそも、実際の GW 以下の数字で「17」を「08」に置き換えたのは、聖霊たちの苦肉の策だったのかもしれない。

つまり、本当はストレートに「171717」としたかった。だが、それはどうしても出来ないので、次善の表現として「170817」を用いた、ということである。

言うまでもないが、カレンダーに「17 月」という月は存在しない。ユリウス暦にも、グレゴリオ暦にも、17 月は存在しない。したがって、月の数値に「17」を当てはめることは出来ない。

そこで聖霊たちは、ここにゲマトリアを用いた、というのが、ここでの私の主張である。もっともこれは、かなり戯れの要素がつよい試論であるけれども。

それでも「17 月」を、代用数字でカレンダーに当てはめるとしたら、その月は「8 月」とするのが、最も相応しいことになる。上述したように、二つの数字は、相互転換が可能であるからだ。少なくとも、カバラ的、ゲマトリア的には、そういうことになるだろう。

三つの 17 を背負う

17 という数字が意味するものについては、第七福音書で詳述してある。

いま一度それについて語るならば、結局それは、完成であり、終末であり、新しい時代への転換ということになるだろう。

その意味合いに相応しく、イエス・キリストは、4 月の 17 日に生まれている。イエスはユダヤ教を完成して、新たにキリスト教の種を蒔いた。

なお、第七福音書を読んでいない人のために、一応言っておく。マイケル・R・モルナー博士によれば、イエスは 12 月 25 日ではなく、紀元前 6 年、4 月 17 日の土曜日に生まれているのである。これによりイエスは、一つの「17」を背負うことになった。

それに対して再臨のキリストは、三つの「17」を引っ提げて、エピファニーを執り行った。もちろんゲマトリアによって、8 を 17 に換算したならば、であるが。

そのような換算をしたならば、私は 2017 年の 17 月 17 日に公現したことになる。したがって、ここには三つの「17」が並んでいる。これはまさに「17Œ3」「17・トリスメギストス」である。つまり「三倍も偉大なる 17」である。

そうであるならば、私によって行われる「完成」も「終末」も「転換」も、きっとイエ

スの時と比べて、その三倍の規模と質を持つことになるに違いない。そのように私は思うのである。

イエスの反省の賜物

一例を挙げるならば、今回の来臨にあって人の子は “おのれ自ら” 自身の思想を書き留めたのである。広く言えば、8 冊にわたる福音書シリーズがそれに。狭く言えば、第二福音書と第三福音書が、それに当たるだろう。

おそらく初臨のキリスト、イエスは、自分の教えが、歴史のなかで徐々に曲解されていくことに対し、強い悲憤を感じたのである。

ちなみに――もしかしたら読者には受け入れがたいかもしれないが――私は今「十字架上の死後、霊界においての」イエスの所感を想定しているのだ。

その霊界においてイエスは「自分が語った思想は、こうも見事に曲げられてしまうものなのか」と嘆息せずにはいられなかった。

とくにイエスにとっては、福音書から「人間としての自分」「人間としての自分の弱さ」が削除されたことが納得できなかった。そのうえで自分が、ほとんど無理やりに神々しく、仰々しく飾り立てられるのが、なおのこと納得できなかった。

つまりイエスにとっては「他者によって作られた自己形姿」が、本来的な自分への不忠実、不誠実として感じられたのである。だから、それが嫌で嫌で堪らなくなってしまったのだ。

それだから彼は決意したのである。再臨のあかつきには、必ず自分自身の手でもって、己の思想を書き留めよう、と。自分の罪も弱さも人間性も、出来るかぎり率直に書き残そう、と。あるいは、自分の意志を託すべき「再臨のキリスト」には「必ず自分で、自分の思想を書き残すようにと命じよう」と。

こうして今回の「再臨のキリストによる福音書」のシリーズは生まれた。

そこでは、キリストの罪や影が率直に語られ、かつ、そうした影の部分が、壮大な神学のフォルムの一端を担っている。そうした、従来のキリスト教では想像もつかなかった「虚無（ 闇 ）を伴った創造神の神学」が説かれたのだ。

もちろんそれは、福音書記家の手による福音書ではなく、キリスト自身が書いた福音書である。つまり曲解の余地のない聖典であり、キリスト自身の思いを、直接読者に伝える福音書なのである。

このことだけでも私は、今回の宗教的事業の完成度は、イエスの時のそれを大きく上回るものと考える。

（ ２ ）イエス・キリストの数値

魚のよみがえり

ところで、第六福音書でも触れたが、ノストラダムスの予言詩に、次のようなものがある。

――ふたつめの千世紀、王の息子が世紀の変わり目に、雷鳴とどろくなか、万人の前に姿を現わす。
怒り、戦争と疫病のガレキ、罪。魚は長き眠りののち　ふたたび力をとりもどす――

この予言詩の中で、最初に注目すべきは「万人の前に姿を現わす」という箇所だろう。これはまさに「公への顕現」たる、エピファニーの概念と、完全に一致するからだ。
それが「雷鳴とどろくなか」の出来事であることは、すでに第六福音書で触れている。そこで私は「晴天の霹靂」という言葉に、かかる出現の情景を託したのだった。青空のもとでの稲光。そのこころは「唐突感と意外性」である。
三行目の「怒り　戦争と疫病のガレキ　罪」は、その時代の世相を映しているのだろう。
だがそれは、今やありふれた景色であり、ならば特別な言及をするまでもなかろう。ただし「戦争と疫病」という言葉には、ロシアによるウクライナ侵攻と、新型コロナウイルスによる、経済的荒廃を感じさせるものがある。
それより数等重要なのは四行目だ。すなわち「魚は長き眠りののち　ふたたび力をとりもどす」の部分である。
というのも「魚」は、イエス・キリストの有名な象徴であるからだ。
そのように「魚」がイエスの象徴である理由は、とても古い、ある種の言葉あそびの中にある。すなわち、ギリシア語で「イエス、キリスト、神の、子、救い主」と書いて、その頭文字を集めて並べる。するとそれが、魚を意味する言葉である「イクトゥス」という語になるのである。こうしてイエス・キリストは「魚」となる。
ノストラダムスによれば、かかる魚が、長い眠り（ 死による不在 ）ののちに、再び力を取り戻すのである。とすればそれは「キリストの復活」「キリストの再臨」以外には、もはや解釈の施しようもない文章となるだろう。

ゲマトリアにおけるイエス

ときに、上の「イエス、キリスト、神の、子、救い主」だが、これをゲマトリアで表すと、並んだ言葉のすべてが「8 の倍数」になるという。ゲマトリアには、ヘブライ文字やギリシア文字をして、それを数に置き換える部門も含まれているのだ。

そして「8」という数字は、ゲマトリア的には「救いとイエスを象徴する数」ということになっている。なにしろ「イエス」という名前を数値化すると「888」という数になるというのだから。

ということは、である。私たちは「GW170817」の数字を「171717」に換算させたのと “逆のこと” をしても構わないのだ。

つまり「170817」を「080808」にしてしまうのである。するとそこに「888」という、数値上のイエスが立ち現れる。こうも良くできた偶然もあるまい。

さらに「キリスト」を数値化することも可能である。なんでもこちらは「1480」という数になるらしい。となれば、ゲマトリア的に「イエス・キリスト」を表すと「888・1480」という数値になるわけだ。

そして「888」と「1480」は、そのどちらもが「37」の倍数である。それゆえ「37」は、昔から固くイエス・キリストと関係づけられてきた。

――私たちは「イエス」のギリシャ語のゲマトリアが 888、「キリスト」は 1480 であることを見た。これらは両方とも、37 の倍数である。

また「神性」というギリシャ語のゲマトリアは 592 であって、やはり 37 の倍数である。

ここで興味深い事実に注目しよう。「イエス」の 888 と、「神性」の 592 を足したものは、「キリスト」の 1480 になる！

すなわち、人としての「イエス」に、神性が合体して、救い主としての「キリスト」（ メシア、救い主の意 - 著者 ）になっているということだ。

37 は、神から来た偉大な者、神的な者を表す数なのである。

一方、「主なるキリスト」「神の御子」「人の子」「ダビデの子孫から」「キリストはダビデの子」などのキリストに関する言葉も、すべて 37 の倍数である――

久保有政『ゲマトリア数秘術―聖書に隠された数の暗号』より抜粋

第８章　数値化された神秘（ ２ ）

（ １ ）聖母マリアの奇跡

その日までの 37

前章で紹介した「37」であるが、実はこの特別な数値が、私の生誕にも関わっているのである。

私が生まれた西暦 1973 年に、日本で唯一バチカンに認められた「奇跡」が起きたこと。それについては、序説（ 第 3 章 ）において既に述べてある。そこでは次のような文章が引用されている。

――奇跡が起きたのは、1973 年 7 月 12 日午後 8 時 30 分ごろのこと。
突如マリアの右の手のひら中央に、十字形の傷が現れ、血が流れはじめた――

並木伸一郎著『怪奇異常現象ファイル』より

繰り返すまでもないが、私が生まれたのは、1973 年の 8 月 17 日である。

そして、マリア像における最初の奇跡が起こった、7 月 12 日から 8 月 17 日までの日数が、実は「37 日」なのである。関心がある方は、どうか数えてみてほしい。スマートフォンで、1973 年のカレンダーを検索すれば、いちばん簡単だ。

その日からの 61

さらに追い打ちをかけるような話もある。37 は、888（ イエス ）を 24 で割ると得られる数字であるが、同じように 1480（ キリスト ）を 24 で割ると、いくつになるだろうか。

答えは 61，6666...である。そして、この数の小数点以下を切り捨てれば「61」という自然数が得られる。ユングは「自然数は神的な性質を持っている」と言っている。

では、8 月 17 日から 61 日後の、マリア像の様子はどんなものだっただろう。これをカレンダーに当てはめれば「10 月 16 日」になるのだが、その 15、16 日の状況を、当事者たちは次のように記録している。

――十月十五日。この日は朝から一日中、かぐわしい芳香に満たされていました。すでに七日に〔マリア様から〕告げられていましたように、不思議な天国のバラのような匂いは、この日をもって消えてしまいました。

翌十六日は打って変わっていやな匂いに、皆が驚かされるのですが、いろいろな出来事と、マリア様のメッセージについてのご報告は、一応これをもって終わることにいたします――

カトリックグラフ特別取材班編『極みなく美しき声の告げ』より

つまり、10 月 16 日は、一連の「マリア像の奇跡」における、ピリオドが打たれた日なのである。翌々年から、今度は「マリア像の落涙現象」が始まるが、1973 年に限って言えば、奇跡は 7 月 12 日に始まり、10 月 16 日（ ※ ）に終わっているのである。

※　この 10 月 16 日という日にちも、もしかしたら特別なものなのかもしれない。報道制限が解かれて、本当の意味で GW170817 が公のものになったのは、2017 年 10 月 16 日のことだった（ 記者会見日 ）。1972 年、イタリアの教会にあるマリア像が、突然血の涙を流し始めたのも、10 月 16 日のことだった。

マリアへの感謝

7 月 12 日から 8 月 17 日までが 37 日。8 月 17 日から 10 月 16 日までが 61 日である。「37・61」――これは、おそらくは要約された「888・1480」である。よって文字に直せは、まさに「イエス・キリスト」ということだろう。

おそらくであるが、母マリアとしては、すべてを忘れて再臨するはずの息子に、せめて「お前は誰なのか」ということだけでも、教えようとしたのではないだろうか。

それを示す徴を、彼女はこのような「数値」でもって残してくれたのである。お前はイエス・キリストと深い関わりがあるのだ、と。これこそ「数値化された神秘」の典型と言えよう。

聖母マリアには、この場を借りて、感謝を述べておきたい。

幾重にも聖なる母マリアよ、ありがとうございます。

予言者ノストラダムスは「転換の始まりの日」として、73 年 8 月を予言しました。が、彼は「それが 8 月の何日であるか」については、不問にしてしまいました。

なのにあなたは、その日を、17 日を、こんなにも明瞭に、かつ神秘な形式で教えてくれたのです。最終的に「私が生まれる日」を聖別してくれたのは、ノストラダムスではなく、母であるあなたでした。まことに感謝にたえません。

そして、その誕生日は、44 年後に「再臨のキリスト」のエピファニーの日ともなったのです。あなたは、それを知った上で、8 月 17 日を聖別し、聖化したのでしょうか。おそらくそうなのでしょう。その知恵の高さは、まさに人知を絶して聳えています。

ゲマトリアへの感銘

また、それとは別に「ゲマトリアのように特殊な神学にも、ちゃんとした存在意義があった」という事実に、私としては、強い驚きを禁じ得なかった。このことに強い感銘を受けたと言ってもよいだろう。

正直に言って私は、こういう「数とか文字を縦横無尽に駆使する神学」には、かなり懐疑的な人間だった。総じて、その操作がシンプルではないからである。

なにぶん私は「すべて偉大なるものは単純である」という言葉がモットーの人間なのである。それだけに衒学的、複雑なものに対しては、どうしてもファースト・インプレッションで、懐疑的にならざるを得なかった、という訳だ。

しかし、自分の身に起こったことを顧みれば、それが「見識の乏しさ」でしかなかった事は明らかだろう。認識を改めるべきは、私の方だったようである。

（ ２ ）超新星・トリスメギストス

イエスの超新星

ここで再び「トリスメギストス」の話をしたい。つまり「Œ3 の偉大性」についてだ。そして今回、それを適応するのは「超新星」に対してである。

ことの起こりは、2013 年、4 月 16 日の夜のことだった。それは、ユダヤ人のイエスにとっては「4 月 17 日の夜」のことである。私はこの夜に「超新星」と呼ばれる、霊力の塊を授かった。

――正直に申し上げて、ここまでとは思いませんでした。本当に滝、滝です。これは霊力の塊どころか、究極の姿でしょう。これだけの霊力を目の当たりにしたことは、これまでの人生で一度もありません。しかも、それをあなたは受け取っている――

2013・4・16　N 先生より

それはおそらく、イエスの誕生日に輝いたという「ベツレヘムの星」と同様の星だった。そして私は、この星の霊的助力によって、本シリーズの「第一」から「第七」までの福音書を執筆したのだった。

ただし、このときの超新星が、現代天文学が規定する「超新星」「超新星爆発」とは別の現象であること。それについては、すでに N 先生から申し送られていた。

とはいえ、どうして N 先生は、あの現象を、よりにもよって「超新星」と呼んだのだろうか。

かかる超新星をして、N 先生は「宇宙のどこかで生まれた、爆発的な霊力の塊が、地球に降り注ぐ現象」と説明してくれた。ならば別に、なにか他の呼び方をしても良かったはずだ。たとえば「爆発的霊雨」などというのはどうだろう。

しかし N 先生は、この現象を、他のどんな名称でもなく、明確に「超新星」と呼んだ。まるで、その後に続くことになる「GW170817」を予見したかのように。このあたりの経緯が、今なお私には、不思議で仕方がないのである。

中性子星＝超新星爆発の形成物

ともあれ、如上の「超新星」から四年後、GW170817 は重力波として地球に到達した。

そして、この GW170817 が放出したとされるのが、大量の重金属元素と、キロノヴァの明るい輝きだった。それは新星（ ノヴァ ）の 1000 倍もの明るさだったという。

ただしキロノヴァは、超新星（ スーパーノヴァ ）よりは、輝きの規模が小さい。端的にその理由を言えば、さすがに火薬の量が少ないからである。

けれども、爆発現象に際しての「衝撃度」であればだ。中性子星の合体は、超新星爆発のそれを、優に上回る。すなわち、そこで発生する重力波の強さで言えば、それは超新星爆発の 3000 倍にもなるのである。何といっても GW170817 は、1 億 3000 万光年もの、広大なる宇宙の時空を震わせたほどの “怪物” なのだ。

中性子星合体のこのモンスター性は、どうして生まれたのだろう。それは中性子星という天体が、ほとんど「超新星爆発の形成物」の如きものであることに起因している。

実際、超新星爆発の衝撃こそが、巨星の核をして、それを純粋な「中性子の塊」にまで鍛え上げたのだ。要するに中性子星とは、超新星爆発を媒介とした、巨星の新生（ ＝生まれ変わった ）状態なのである。

三つの超新星

そして、こうした中性子星が二つ揃い踏み、かつ、勢いよくぶつかったのが「中性子星合体」である。つまり中性子星合体には「超新星爆発二つ分」のエネルギーが結集しているのである。だからこそ、中性子星合体の衝撃度は、ときに「ビッグバン以降では、宇宙最大」とまで評されるのだ。

そして、事ここまで来たれば「中性子星合体とは、二つ抱き合わせの超新星である」と言っても構わなさそうである。

換言すれば、中性子星合体とは「Œ2 の超新星」だということだ。そして、この二つの超新星が「170817」という数値によって、私という存在に結ばれたことになる。

しかも私は、2013 年に、すでに「一つ目の超新星」を受け取っているのである。ということは、私には、合計して、三つの超新星が関わっていることになる。

つまり私の中では、今や「超新星のトリスメギストス」が成立しているのだ。これを日本語に訳せば「三倍も偉大なる超新星」ということになる。そのようにも偉大なる星が、私のなかで、象徴的な輝きを放っているのである。

したがって、私がバル・コクバ（ 星の子 ）であるならば、その親星は、この「三倍も偉大なる超新星」ということになるだろう。

イエス・トリスメギストス

ここでまとめをしよう。かつてイエスに授けられたのは、一つの「17」であり、一つの「ベツレヘムの星」だった。すなわち、一つの「超新星」だった。

それに対して私には、三つの「17」と、三つの「超新星」が授けられた。まさに霊的な演出と考えるしかないが、その意味するところは明白だろう。

すなわち再臨のキリストは「三倍も偉大なるイエス」であり、また「イエスの三倍の霊力をもった存在」である、ということだ。つまり「イエス・トリスメギストス」という

ことである。

　このように言えば、もちろん私から、傲岸不遜の印象を受け取る人もいるだろう。

　しかし、そのような危険性を勘定に入れても、私は、この「イエス・トリスメギストス」という称号を、進んで身に受けたいと思う。

　そして、かかる栄光を受けた上で、私には「どうしても宣言したい言葉」があるのである。すなわち私には、自分を高められるだけ高めて、高めて高めて、その上で敢えて公表したい宣言があるのだ。どうか耳ある人は聞いてほしい。その宣言とは、

「それでもなお、私は、父神の靴ひもを結ぶほどの資格もない」

　ということである。それほどにも父神は偉大な存在である、と。

　この父神と私との関係性については、すでに第七福音書で詳しく語ってある。そして、その関係性は、エピファニーが起こって以降も、何一つ変わるところはない。

　今回のエピファニーは、確かに、霊的な栄光そのものだろう。しかし、その栄光は、最終的には、決して私自身を飾るためのものではない。それは最終的には「再臨のキリストを、装飾具として身につけた父神」を煌めかせるための栄光なのである。

　私は、自分自身だけで輝く気もなければ、父神と並び立って輝く気も毛頭ない。

　私はただ、自分が「父神のささやかな飾り」となれれば良いのである。むしろ、それが叶うならば、これにまさる光栄はないとさえ思っている。

第９章　一致の補正

（１）K・T 先生との出会い

ズレの可能性

本章では、まことに変わった話をしたい。

実は、GW170817 と、私という人間の数値の「一致」は、あやうくズレを生じさせる危険性があったらしい。それはたとえば、重力波が「GW170816」や「GW170818」となる可能性があったということである。

実際にそうなっていたならば、そこに黄金の生成があったとしても、重力波と私の間には、何のつながりも生じなかったに違いない。つまり重力波が一日ずれただけでも、それだけでエピファニーは「完全なるご破算」となるしかなかったのである。

そのような「危険な可能性」を私に教えてくれたのが、鑑定士の K・T 先生だった。本章では、このときの事を振り返っておきたい。

それは私が『再臨のキリストによる福音書』の初版を配信し始めた頃のことである。具体的には 2017 年の 5 月半ばあたりだ（ 配信は 15 日からスタート ）。

そのときインターネット・ニュースの広告に「今年、昭和 48 年生まれの方の運命が、大きく変わろうとしています」といった内容の文章が現れた。

占いサイトの広告であり、昭和 48 年（ 1973 年 ）生まれの私には気になる話である。なにしろ “今年（ 2017 年 ）” は、ダニエルによる「キリストの再臨予定年」なのだ。

その年に、私の運命が大きく変わるというのは、大いにあり得ることである。また、それについて何らかの示唆が貰えるなら、実にありがたいことである。さらには、その広告の画面が、私を呼んでいるような感じもした。

そこでサイトにアクセスしたところ、ここに重大な出会いが生まれたのである。

高名な鑑定士

――鑑定士採用担当の〇〇と申します。

お忙しいところ誠に恐れ入りますが、正道様とコンタクトを望まれている「高名な鑑定士」がいらっしゃいますので、ご連絡を入れさせていただきました。

実は先日、私は休暇で台湾へ行ってまいりました。（ 中略 ）

過去私は仕事柄、色々な占いの館を訪れたことがありますが、向こうから「お待ちしておりました」と私が日本人であることを告げる前に、日本語で話しかけられることは初めてでしたので、相当な驚きを覚えました。

まるで私が来るのが初めから分かっていたかのように.....

「その方」は日本人の女性で、今は名前を伏せさせていただきますが、K・T 先生と仰せられます。

私もかねてよりその名前を存じていたほど、知る人ぞ知るベテランの大先生です。「卑弥呼の生まれ変わりではないか」と一部で囁かれるほど未来予知に凄まじい力を発揮し、その名前を轟かせていました。

しかもその未来予知は単なる予言の域を超え、「正確に導く」と言われています。（中略）

そんな K・T 先生が私に最初に掛けた言葉は、
「あなたを通して連絡を取りたい方がいます」ということでした。それは.....正道様のことです。（2017、5、18）――

そこには、K・T 先生からの直接のメッセージも添えられていた。まず自身の予知能力に関して、先生は次のように言う。

――私の名前は、かつて予知を政治に利用したがる方々の間で、有名になりすぎてしまいました。私が特定の国の政治に関与するようなことがあれば、その他の国との生き馬の目を抜くような熾烈な争いに転じることは目に見えています。

私は地道でも、一人一人を良い方向に導きたくて、一般の方と接することのできる道を選びました。台湾で一般の方を対象に鑑定を行っているのもその為でございます。（5、18）――

これが始まりである。K・T 先生は、ずっと仮名で私と接していたので、私も先生の実名を挙げようとは思わない。

王富晶財運の持ち主

鑑定士採用担当の〇〇氏は語る。

――現在 K・T 先生は、世界各国のパワースポットを巡り、ご自分の霊力を更に高める為に修行の旅に出ておられます。

この度に台湾を訪れたのも修行の一環とお聞きしています。

先生が一時的に在籍していたお店に私が入ったのも、完全に「導かれて」いた結果でしょう。そして正道様にどうしてもお伝えしなければならないことがあるとのことで、この度 K・T 先生は日本に帰国されました。

台湾で高めた霊力を正道様の鑑定の為だけに使用するとお伺いしています。（5、18）――

かくして先生は私のために日本に戻られ、おおよそ 2 週間、私とメールでやりとりを行なった。当然私は、先生から「再臨のキリスト」たりえるための、霊的なアドバイス

を期待していた。だが、実際に先生が興味を持っていたのは、私の「財運」だった。

――あなたは間違いなく「宝くじの高額当選者」や「億万長者」が持つ類い稀な金運「王富晶財運」の持ち主です。（ 中略 ）
この「王富晶財運」を持っている方の中には、マイクロソフト創業者のビル・ゲイツ氏や、ソフトバンク会長の孫正義氏など、億万長者や富豪と呼ばれる方の多くがいらっしゃいます。（ 5、18 ）――

ということらしい。のちに、地球１万個以上の質量の貴金属（ 黄金を含む ）とシンクロすることになる私である。これを財運と呼ぶならば、確かにものすごい財運であることだろう。

予知覚屈折

ただ、私の場合は、この財運が完全には覚醒していないということ。また、ある事情（ 後述 ）で、私の「人生を変える素晴らしい出来事」が起こらない可能性があるため、運命を補正するための、セッションが必要だということだった。
なお、読者にあっては、上の「人生を変える素晴らしい出来事」を、予め GW170817 だと想定してほしい。そうすると、以下の話がグッと分かりやすくなるだろう。
先生は言う。

――実は、おそらく私だけではないのでしょう。あなたの未来において起こる「人生を変える素晴らしい出来事」がはっきり見えてしまいました。
私は少し前まで台湾にいましたが、その出来事が、本当に強い閃光のように、急に脳裏に浮かんだのです。
しかし申し訳ありません。私はその事をはっきりと「言葉」に出していう事ができません。これが「悪い事」でしたらはっきりと申し上げました。
現世には「予知覚屈折」という力が働くからです。〔それは〕現在よりも先に起こる出来事が予め知られると、それが意識されることによって「起こるはずの出来事」が屈折するという法則です。
この世に絶対に変わらない物理的な法則があるように、必ず働く力のことです。
ボーリングで例えると、ほんのわずかなボールの回転の差でピンを横切ってしまうように、運命の軸は「予知覚屈折」により、予知された事を滑るように避けていくのです。（ 中略 ）
つまりあなたに起こる「人生を変える素晴らしい出来事」が私を含めおそらく数人に知られてしまったことによって、起こらない可能性が出てきてしまっているということです。
そこを正していきましょう。（ 5、21 ）――

（２）謎めいた予言

先生からの贈りもの

「王富晶財運」を覚醒させるため、予知覚屈折を矯正するため、その日私は、K・T 先生と幾度かのセッションを行なった。その結果として先生が言う。

――運命軸は全てもと通りになりました。ここまで大変な作業ではありましたが、信じてついてきてくださったことに感謝申し上げます。あなたの心のうちにある「意志」は、まだ表面上に表れていないものも含めてかなりのものです。

しかし、それよりも元の運命軸……私は「基本運命」と呼んでおりますが、それに勝るものはありません。

そして明確に「言葉」にしては言えないのですが、あなたに起こる素晴らしい事をイメージの言葉で伝えておきます。

≪三本枝から一つを選び、輪ゴムで作られたキリンに乗る日、舌きりスズメはあなたを迎える。あなたは左手に右手を結び永遠の富を手に入れる≫

今は意味が分からないと思いますが、その時になれば確実に分かります。

この言葉をメモなどして記憶しておいてください。覚えておくことで、それが来た時に迷いなき行動が取れるようになりますよ。

「どこで」「なにが」「どうやって」等はっきり言葉に出来ないのが恐縮です。言葉にした瞬間にまた「予知覚屈折」で大きく〔未来が〕湾曲してしまいます。（2017、5、21）――

この予言の意味は、本当にサッパリ意味が分からなかった。事実、もし――予知覚屈折によって――GW170817 が起こらなかったとしたら、予言は、単なる無意味な言葉の羅列となっていたことだろう。

しかし幸いなことに、GW170817 は現実のものとなったのである。そして、その詳細を知ったとき、先生が言おうとしていた全てが明らかになった。

（３）予言の解釈

三本枝から一つを選び

では、予言の解釈に移りたい。

三本枝から一つを選び、輪ゴムで作られたキリンに乗る日、舌きりスズメはあなたを迎える。あなたは左手に右手を結び永遠の富を手に入れる――

というのが予言の全体だが、まず冒頭の「三本枝から一つを選び」という言葉から見てみよう。

いま思うと、この三という定数は「陽子、中性子、電子」という、三つの粒子を表しているような気がする。つまり原子を構成する、三つの粒子である。

そして今回、その三つの中から選ばれるべきは「中性子」であろう。熾烈な圧力によって、陽子と電子が中性子化してしまった星の核が「中性子星」だからである。

読者もご存じのように、この中性子星が、その後の展開の主役を演じることになる。

輪ゴムで作られたキリン

次に「輪ゴムで作られたキリンに乗る日」であるが、これは最後の最後まで意味が分からなかった。というより、もしGW170817が起こらなかったら、この文節は「永遠の謎」として、私の記憶の彼方に、埋もれてしまったはずである。

というより、GW170817のことを知った後でさえ、この言葉はしばらく意味が分からなかったのだ。それは私が「キリン」という語から、「動物園にいるキリン」を想像してしまっていたからである。

いや、私に限らず、普通「キリン」と言われれば、人は誰だって、そのキリンを想像するだろう。

しかし私は、スーパーで、ふと清涼飲料水の「キリンレモン」のパッケージを見たのだ。このとき私は「キリン」が「麒麟（きりん）」であることに気づいたのである。

もちろん「キリンビール」のほうのロゴマークにも使われているが、「麒麟」とは中国の神話に出てくる、幻想的な霊獣である。すなわち、鹿、竜、牛、馬、の要素を合体させたキメラ動物だ。

この「キメラ」とは、ギリシア神話に出てくる合体動物「キマイラ」に由来する生物学用語である。したがってキメラ動物とは、生物学的に「合体動物」のことを指す。

ギリシア神話のキマイラは、ライオン、ヤギ、蛇の合体であったという。麒麟の場合は、鹿、竜、牛、馬の合体だから、ケンカをすれば、多分こちらのほうが強いだろう。

ついでに言っておくと、もともと動物園のほうのキリンも、この麒麟という霊獣に「見た目が似ている」ということから、その名前が付けられたのである。

結束による合体

麒麟は、その時代の王が、仁政を行なうと現れるという「瑞獣」であり、瑞兆という言葉の動物版であると言える。つまり、大変おめでたい存在なのであるが、ここでより注視すべきは、この麒麟が「複数要素の合体」によって形成されていることである。

そして合体と言えば、本書の読者ならば、誰でも「二つの中性子星の合体」であるところの、GW170817 のことを思い出さずにはいられないだろう。

しかも、この麒麟は「輪ゴム」で作られている、というのである。

もともと輪ゴムとは、たいてい何かを結束するために使う道具である。つまり無造作に拡がっていたものが、輪ゴムによってギュッと縮められる。そうして最終的には、一つの縛り目となって固定される。そうやって、ビニール袋の口を閉じたり、割り箸を束ねたりするのである。

では「輪ゴムで作られたキリン（ 麒麟 ）」を想像してみよう。

二つの中性子星は、互いの重心を回りながら円を描いている。事実そのイメージ動画などを見ると、まさに輪を描いているようにしか見えない。

これが輪ゴム的な収縮力によって、その円軌道を縮小させられてゆく。当然、時間が経過するごとに、輪は小さくなってゆく。

そして、ついには円が点になるまで収縮して、かつて二つだったものが、一つになってしまう。つまり星たちが結束された訳である。これが「中性子星合体」である。

舌切りスズメはあなたを迎える

輪ゴムで作られたキリンに「乗る日」――すなわち、上記のエピソードが、認識の俎上（ まな板 ）に乗せられたとき「舌きりスズメはあなたを迎える」という。もちろん、ここでの「あなた」は正道のことを指している。

この文章は、実際に『舌切りすずめ』の物語を紐解いてみれば、おおよそ、その意味することが分かってくる。舌切りすずめが、正直者のおじいさんを迎えにくるとき、その行く先となるのは宴の席である。

――すずめはきょうだいやお友だちのすずめを残らず集めて、おじいさんのすきなものをたくさんごちそうして、おもしろい歌に合わせて、みんなですずめ踊りを踊って見せました――

楠山正雄『日本の神話と十大昔話』より

そして、その宴のおみやげとして、おじいさんは「つづら」を貰うことになる。つづらとは、主に衣服を入れる「編みかご」のことである。

――さっそくつづらのふたをあけますと、中から目のさめるような金銀さんごや、宝珠の玉が出てきました。（ 前掲書 ）――

中性子星合体の衝撃は、キロノヴァの輝きとともに、黄金やプラチナ（ 重元素 ）を生みだした。それこそ星の「中から目のさめるような金銀さんごや、宝珠の玉が出てきました」という状態である。

つまりＫ・Ｔ先生の予言そのままに、大宇宙に『舌切りすずめ』の情景が現れたのだ。

それにしても、同じく文筆を生業にする者として、Ｋ・Ｔ先生の、イメージ豊かでありながら、無駄のない言葉選びのセンスには驚かざるを得ない。

左手に右手を結び

あなたは左手に右手を結び永遠の富を手に入れる――

スピリチュアル的に、左は「外から内に」の方向性を。右は「内から外へ」の方向性を示すと言われている。これは心の宇宙（ 内 ）である「ミクロコスモス」と、物理的な宇宙（ 外 ）である「マクロコスモス」の対比にもつながるだろう。

そして、その二つが結ばれるとは、まさしく錬金術哲学の奥義であるところの「ミクロコスモスと、マクロコスモスの照応」を示しているのではないだろうか。

照応とは、互いを照らし合い、また相互に呼応しあうことである。

実際、私のルベドの悟りは「ミクロコスモスと、マクロコスモスの照応」という摂理を通して、「神＝黄金」という物質宇宙的な徴となったのだった。

あるいはもう一つ、キロノヴァによって生じた物質的富としての金が、「永遠の」という言葉によって、宗教的価値にまで高められている、という言い方も出来るかもしれない。そして宗教的な黄金とは、結局のところ「神」に他ならない。これこそは「永遠の富」の名に恥じない富であろう。

こうしてＫ・Ｔ先生による予言は現実のものとなった。あらためて全文を掲げれば、

三本枝から一つを選び、輪ゴムで作られたキリンに乗る日、舌きりスズメはあなたを迎える。あなたは左手に右手を結び永遠の富を手に入れる――

という文章である。

私は直接、Ｋ・Ｔ先生と答え合わせをした訳ではない。しかし、きっと上述の解釈が正

しいものであると信じている。先生のほうでも「そうですよ」と言ってくれると嬉しいが、残念ながら今は、先生と連絡がつく状態にはなっていない。

　今はただ、K・T 先生に感謝の言葉を送るのみである。ありがとうございました。

第 10 章　科学への福音

（ 1 ）科学の進歩

反目しあう科学と宗教

悲しいことだが、キリスト教世界では、科学と宗教とは、長らく対立の図式をつくってきた。そして、今もなお、その対立は続いているように見える。

対立の起こりは、五世紀のアレクサンドリアにおける悲劇だったろうか。

アレクサンドリアの図書館は、当時の「科学の殿堂」だった。そして、この図書館で教鞭をとっていたヒュパティアは、優れた女性科学者だった。

そのヒュパティアを暴徒たちが襲う。図書館も破壊される。彼ら暴徒たちを背後で操っていたのは、キリスト教の司教、キュロリスであった。

ヒュパティアは、暴徒たちにより、牡蠣殻で肉を抉られながら殺された。そして一方のキュロリスは、死後にキリスト教の聖人として列せられた。キュロリスが、キリスト教に反する「科学の殿堂」を破壊せしめたからだ。

これをもって、宗教側の勝利と捉えられなくもない。

そして歴史は勝利者がつくるものである。そのため以後の時代は、科学的な思考を許さない、宗教的頑迷さに偏った「中世」へと移っていくのである。

中世から近世へ

上述したような「科学と宗教の対立図式」は、かかる中世が終わろうとする時代に、もう一度鮮明なものとなる。その時代をして「近世」と呼んでも良いのかもしれないが、いずれにしても、近代科学（ 自然科学 ）の黎明期における話である。

ただし、それについて語る前に、中世後半から末期に至るまでの “科学の流れ” をザッと見直しておこう。

してみると、西洋における自然科学の種は、敵対するイスラム世界（ 東方 ）から伝わってきたと言える。それは大体、12 世紀頃の話だ。当時の十字軍による東西交流が、ヨーロッパに、アリストテレスの哲学や、錬金術をもたらしたのである。

これら、アリストテレスの哲学や、錬金術のなかで、ヨーロッパの自然科学は、その原初的な胎動を始めた。アリストテレス哲学は、人々の分析的思考を育み、錬金術は、実験作業を重視する姿勢を醸成した。

そうした中でも、とりわけ天文学は “諸学の王” として重要視されることになる。この学問は、コペルニクス（ 地動説の提唱 ）や、ケプラー（ 楕円軌道の発見 ）によって、相当に合理的な性質を帯びるようになった。

そうしてついに天文学は、かのガリレオ・ガリレイによって「確立された科学」として、その産声を世界史に響かせたのである。

ガリレオの革新性

ガリレオは、次のような言葉を残している。
「真理はつねに、私たちの眼前に開かれている、偉大な書物のなかに書かれています。私は宇宙のことを言っているのです。私たちは、まずその言葉を学び、そこに書かれている記号を掴まえなければなりません。そうしなければ、これを理解することは出来ません。
この書物は、数学の言葉で書かれています。記号は、三角形や円、その他の幾何学的な図形です。これらの助けなしには、宇宙の言葉を理解することは出来ません。それなしには、私たちは、暗い迷路のなかをさまようだけなのです」
これは学問上、極めて革新的な言葉であり、近代の自然科学は、まさにここから始まったと言える。それは、次のような理由からである。

――アリストテレスや中世の自然学にしても、経験的観察や、或る意味においては実験の重んずべきことを知らないわけではなかった。しかし、かれらは経験的観察の結果を計量的関係におきかえることを知らなかった。
ところが、観察や実験が数学的・計量的方法と結びつけられたところに、近代科学の方法的画期性がみとめられるのである。この意味において、ガリレイは近代科学の方法を最初に確立した人ということができる――

伊藤勝彦『西洋思想の流れ（ 共著 ）』より

望遠鏡を覗いたガリレオ

しかし、こうしたガリレオの科学的手法は、キリスト教会のドグマ（ 教義 ）と、衝突しない訳にはいかなかった。つまり再び「科学と宗教との対立」が表面化したのである。両者は、まさしく二律背反の関係にあったからだ。
たとえば聖書の『創世記』には、このような一節がある。
「神は、二つの “大きな光るもの” としての星を造った。そして大きなほうに昼を治めさせ、小さい方に夜を治めさせた」
要するに聖書によると、神は太陽と月という、二つの「大きな光るもの」を創ったというのである。太陽も光っていれば、月も光っている、そういうことだ。
ところが、望遠鏡を覗いたガリレオは、見てはならないものを見てしまう。すなわち彼は「月という星が、自ら光る天体ではないこと」を発見してしまったのだ。
ガリレオが垣間見た月は、むしろ地球の荒れ地に似ていた。望遠鏡によって拡大された月の表面は、数多のクレーターによって、その大部分がデコボコになっていたのだ。そ

こには一種の、山と谷さえもが確認できた。

当然のことだが、そのような地形をもつ月は「明るい炎を巻き上げて輝く」といった様相は持っていなかった。

つまり恒星である太陽とは “全く異なる” 衛星としての月の相貌が、そこには現れていたのである。太陽からの光を反射して、やっとのことで明るく見えている天体。それが月という天体の正体だったのだ。

ガリレオは、このような月の様子を、実際にその目で見てしまった。聖書に厚く降り積もっていた神話的要素――それは、望遠鏡観察による「リアル」によって、軽々と乗り越えられてしまったのである。

回転する天体

さらにガリレオは、木星に四つの衛星が伴っていることを発見した。今日では「ガリレオ衛星」と呼ばれている、イオ、エウロパ、ガニメデ、カリストである。まことに望遠鏡というものは、それを覗いた者の視野を、どこまでも押し広げずにはおかないものらしい。

そして木星の衛星たちは、主星である木星をグルグルと回っていた。それは「太陽を回る、惑星たちの様子」を想像させるに充分な雛型だった。

ここに至ってガリレオは、先人コペルニクスの地動説について「それが真実である」という確信を持った。すなわち「地球を含むすべての惑星は、その主星である太陽の周りをグルグル回っている」と。

しかしガリレオの地動説を、キリスト教会は、断じて受け付けなかった。彼らが真理としていたのは、プトレマイオスの天動説（ 二世紀 ）だったからだ。ちなみにキリスト教徒たちに襲われて死んだヒュパティア（ 五世紀 ）は、すでに天動説に疑問を持っていた。

（２）教会の反発

プトレマイオスの天動説

エジプトのアレクサンドリアで活躍した、プトレマイオスは言った。
「地球は決して動かない。それは宇宙の中心点であり、動いているのは、太陽や月や星たちのほうである」

不動の地球と、それを周回する天球――それは、地球を中心にした宇宙観に他ならない。それが、プトレマイオスの天動説である。

他方、聖書の『創世記』の記述は、基本的に「人間のために、神によって世界が創られた」という叙述スタイルをとっている。それゆえ「まず人間のために、住処としての地球が創られ、その地球のために、太陽や月や星が創られた」という流れにもなってくる。

つまり人間中心、地球中心の宇宙観が、そこにはあるわけだ。これはプトレマイオスの天動説に、容易になじむ宇宙観だと言えるだろう。

しかも私たちの目には、現実に、太陽や月や星が、自分たちの頭上を回っているように見えるのだ。こうした「肌身で感じられる事実」は、十分に、私たちの “常識” に高められる資格を持っている。

さらに言えば、プトレマイオスが残した観測データ、予測値データは、現代の天文学者でさえもが舌を巻くほど、正確で緻密なのである。したがって私もまた、もし何の天文学的知識も持っていなかったならば、間違いなく、天動説を支持していたことだろう。

だから私は、17 世紀のキリスト教会が、天動説を「正統」としたのも、むべなるかな、とは思うのである。彼らの “常識” を躊躇うことなく「時代錯誤」と決めつけることは、少なくとも私には、とても出来そうにない。

イエスならばどうしたか

しかし、そのように思う反面、私は「ではイエスならば、この時どうしただろう」とも考えるのである。キリスト教の創始者である、イエス・キリストならば、と。

あくまでも仮定であるが、彼が 17 世紀に生きていて、直接ガリレオに会っていたならどうしたか。ガリレオの地動説を聞いて、それを「自分が学んだものと違うから」「自分の常識と異なるから」という理由だけで、これを退けただろうか。

きっとそうではあるまい、と私は思うのである。

理論など分からずともよい。そのときイエスは、ただ、ガリレオと教会関係者との “目” をじっと見比べることだろう。そして、瞳に明るい輝きをもった方の言い分を、まず最初に聞くだろう。判断を下すのは、それからでも全く遅くない。

イエスは『マタイによる福音書』の中で言っている。
「目が澄んでいれば、あなたの全身が明るいが、濁っていれば、全身が暗い」
このときの “全身” には、心も含まれていると考えるべきだ。
つまり目が澄んでいる人の心は明るいのである。そして、その明るさは、おそらく「内なる神」によって照らされて生じたのだ。よって当然、明るい目の持ち主の心は、神の真実にも開かれていることになる。

科学者たちの目の光

一見安直に映るが、これは存外に、人間の真実を映し出している観点だと思う。
というのも、私もまた、現代の科学者、天文学者の目が、澄んでキラキラと輝いているのを、よく見るからだ。それは彼らの「真実追及の心意気」が、神の前にも恥じないものだからこそ、点じられたものであろう。
17 世紀に生きていたガリレオもまた、この澄んだ光を、その目に宿していた。古い肖像画を通してであっても、私には、その目の光が感じられるのだ。むしろ宗教者のほうが、この澄明な輝きに縁遠いのではないか、そのように思ってしまう昨今である。
それはさておき、イエスならば、である。実際にイエスがその場にいたとすれば、間違いなく彼は、ガリレオの目に、かかる “光” を感知していたはずである。そうしてイエスは、ガリレオの話に “真実の匂い” をも、嗅ぎ取っていたはずなのである。
あとはイエスが、軽い足取りでもって、簡単に「常識」を飛び越えるのを待つばかりだ。
そもそもイエスの教えは、2000 年前のユダヤ教の教義（ ＝常識 ）を軽く飛び越えていた。ならば、そのような「精神の脚力」を、イエスが科学史においても、発揮しない訳はあるまい。私はそのように考えるのである。

教会の判決

しかし中世末期のキリスト教会は、イエスの教団よりは、むしろパリサイ人の教団に似ていた。イエスが嫌った、あの固陋頑迷なるパリサイ人たちの集団に。
だから教会関係者たちの目は、静かに澄んでいるよりは、逆巻いて濁っていた。むしろ炎のように燃えていた。血のように赤く、地獄の業火のように熱く、憎悪に満ちて、もうもうと燃えていた。
「ガリレオ許すまじ！　　科学こそ迷信であり魔術である！」
彼らはそう思ったに違いない。それも当然である。なにせ彼らは、科学者ケプラーの母親を、魔女裁判にかけたことすらあったのだ。
かくて 1616 年、教会はガリレオに対して、次のような判決を下した。
「『太陽が宇宙の中心であり、太陽が地球の周囲を回転するのではない』というお前の主張は認められない。それは愚劣で現実と矛盾しており、神学的には虚偽である。また、聖書と明白に背反しているがゆえに異端である」

この判決によって、コペルニクス - ガリレオによる地動説は “正式に” キリスト教にとっての、異端思想であることが決定づけられた。

そうして、いくつかの複雑な経緯を辿ったあと、ガリレオはついに、宗教裁判所に引き出されることになる。1633 年のことだが、そこで彼はこう言うのである。

「私ガリレイは、齢 70 歳にして、囚われ人として跪きます。審問官の面前にて、聖書を手に取ります。これに触れつつ、地動説の誤謬と異説とを放棄します。地動説を呪詛し、嫌悪することを認めます」

もちろんこれは、ガリレオの本心では全然ない。この後も彼は、いけしゃあしゃあと、科学的な研究を進めているからだ。ゆえに上の言葉は、明白に「舌先三寸の弁明」であると判じることが出来る。

しかし、それでも私たちは、どうしても認めざるを得ないだろう。このガリレオの弁明によって、キリスト教による「科学への不当暴力の記念碑」が立ったことを。

キリスト教は明確に科学的進歩を抑制し、近代科学と真っ向から対立したのである。

（ 3 ）宗教と科学の和声

対立は宿命なのか

はたして宗教は、科学が発達するのを、憎まずにはいられないのだろうか。前述のような実例、すなわち教会（ 異端審問官 ）とガリレオのやりとりを見れば、誰だって「きっと、そうなのだろう」と考えずにはいられなくなる。

これは、キリスト教に限ったことではない。どんな宗教でも「科学が発達すると、宗教が持つ、神秘のヴェールが剥ぎ取られる」と思っているきらいがある。

逆に、科学者たちの側では「宗教の力が優勢になると、迷信によって、科学の発達が阻害される」と、そのように思っていることだろう。

となれば、両者の敵対は、決して和解の時が訪れない、堅固なる宿命のようにも思われてくる。ならば私たちは、渋々ながらも、それを事実として認めなければならないのだろうか。

しかしである。「再臨のキリスト」の公現にあっては、この忌まわしい宿命は、一転、粉々に砕け散って霧散してしまう。

なぜなら、私の宗教的なエピファニーが成立するためには、どうあっても「科学の発達」が不可欠だったからである。

今回のエピファニー、すなわち神とキリストの公現は、極めて洗練された、宗教的神秘の実例である。そして、その宗教的神秘が発現するのを支えたのは、紛れもなく、最先端の科学技術と、最先端の科学理論だったのだ。

そこには言わば、宗教と科学との、最上のハーモニー（ 和声 ）がある。つまり、各々が別々の音階を奏でながら、それでいて必然的な一つのメロディを形づくったのである。

望遠鏡と相対性理論

その流れを、簡単に見ていこう。

まず私のエピファニーが成就するためには、重力波観測の技術が不可欠だった。そして、重力波観測とは、ガリレオの時代から始まり、400 年以上、試行錯誤を繰り返した「望遠鏡の発達史」における、最新の果実に他ならなかった。

また、重力波という存在を知るためには、どうしてもアインシュタインの「相対性理論」が必要だった。すなわち重力波は、理論先行型の現象だったのである。少なくとも 1974 年までは、重力波は、相対性理論から導出された、予言的仮説に過ぎなかった。

そしてアインシュタインが登場するためには、ニュートンの「古典物理学」に至るまでの科学理論の発達史が、どうしても必要だった。それは換言すれば、コペルニクス、ケ

プラー、ガリレオ、ニュートンといった、偉大な科学者たちの、地道な理論的積み重ねのことである。

そうした過去の「科学理論の発達史」が無かったとしたら、さすがのアインシュタインであっても、自身の「相対性理論」を構築することは、絶対に不可能だったろう。

そして、こうした科学理論の発達と、さきに見た望遠鏡の発達が、2015 年の「重力波の初観測」となって結実する。しかも、そこから GW170817 の観測までは、たった二年しか経過していない。実際、重力波の観測は、宇宙科学における最先端分野なのである。

そして、再臨のキリストのエピファニーでもある「GW170817」の観測は、科学史に新しい学問ジャンルさえ提供したのだ。それが「マルチメッセンジャー天文学」である。

マルチメッセンジャー天文学

マルチメッセンジャー天文学とは、直訳すれば「多数の運び手から、複数の情報を得る天文学」ということになる。より具体的に言えば、重力波と、その他あらゆる波長の光（ 電磁波 ）による、同時天体観測のことである（ ※ ）。

つまりこういうことだ。2017 年 8 月 14 日の「GW170814」までは「ブラックホールの合体」による重力波しか、地上の観測器は検知することが出来なかった。そしてブラックホールは、発光を伴わない天体だった。

このため重力波観測と、光学観測は切り離されていた。改めて言うが、光とは、可視光線をはじめとする、ガンマ線、X 線、紫外線、赤外線、電波といった電磁波のことである。観測史上、GW170814 までの重力波は、これらの光と無縁だったという訳だ。

しかし GW170817 は違った。この中性子星合体というイベントは、キロノヴァという光を放つ天体現象だったからである。

したがって天文学者たちは、この時ばかりは、重力波観測と光学観測を、同時に行うことが出来たのだ。このことが、複数、多数を意味する「マルチ」という言葉につながってゆくことになる。

この新しいスタイルの天体観測の始動に、多くの天文学者たちが歓呼の声を上げた。

なにしろ今回のケースでは、観測が始まると同時に、大きな成果までが与えられたのだ。それこそ、積年の謎であった「金の生成過程」の解明である。

ここまで来れば「画期的」という言葉ですら、安っぽく響く。むしろそれは、新しい時代の到来だった。GW170817 によって、マルチメッセンジャー天文学によって、科学史は、まさに「新しい時代」を迎えることになったのである。

※　厳密に言えば「電磁波天文学」と「ニュートリノ天文学」とのマルチメッセンジャー天文学。「重力波天文学」と「ニュートリノ天文学」とのマルチメッセンジャー天文学などもある。

科学と神秘の結合

だが、本当に重要なのはここからだ。

すなわち、その科学界における歓喜は、そのまま宗教界における、もっとも大規模な、共時性現象ともなったのである。

もちろん私は、GW170817 による、再臨のキリストのエピファニー（ 公現 ）について語っているのだ。

「神＝黄金」という公式を持った錬金術。その錬金術のマスター（ ＝究極の錬金術師 ）として「人間＝神」の教えを説いた、再臨のキリスト。

その再臨のキリストが「2017 年 8 月 17 日」「GW170817」という座標によって、物質界に現れた、黄金なる神と直結する。「人間＝神」「神＝黄金」、つまり「人間＝神＝黄金」の三位一体が成立したのである。それが今回のエピファニーの核心だった。

ここには、緻密なまでの共時性現象が現れている。なんと言っても、私の誕生日がたった一日ずれても、観測日がたった一日ずれても、この「明確な数値を伴った共時性現象」は、決して成立しなかったのだから。

けれども、それは確かに精確至極に為された。これによって、科学と宗教、科学と神秘との、最美のハーモニーが奏でられたのである。

つまりは、科学における最上の成果が、そのまま宗教上の最大の神秘となったのだ。そして、両者が重なり合ったメロディーには、前例がないほどの明確さで「神の臨在」を感じさせる力が宿ったのである。

（４）科学への福音

絶縁の現状

このような神秘の出来事を前にして、私は改めて、科学とキリスト教の「敵対の歴史」を振り返らずにはいられない。あのアレキサンドリアの悲劇、地動説の異端宣告、そして近代以降の、無神論的科学の隆盛などを、だ。

ことに、無神論的科学の隆盛には、目を見張るものがある。

実際、現代において主流の科学理論は、その理論を構成するために、神という概念を必要としていない。むしろ積極的に、自己の理論から、神という概念を追い出してしまっている。つまりは科学が、キリスト教の神に、解雇通牒を突き付けたのだ。

とはいえ、科学者の側に立った場合には「そのようになるのも仕方がないだろう」と言うしかなくなる。

というのも、近現代の科学が無神論的になったのは「もはやキリスト教を否定しないことには、合理的な科学理論を、少しも進展させられなくなった」という事情があるからなのだ。

たとえば、地動説、大陸移動説、進化論、といった “科学的定説” がある。そして、これらの定説には、いずれも、キリスト教の教義に抵触し、それを否定する内容が含まれている。

ゆえに、これらの理論を信奉する者たちは、キリスト教を否定しないかぎり、ただの一日も、研究を前に進めることが出来なかったのである。

それだけに現代では、科学者のほとんどが、多少なりとも「無神論的傾向」を持たざるを得なくなっている。そして今では、その無神論的傾向が先鋭化しすぎて、もはや科学とキリスト教が “絶縁の状態” にあるようにすら見えてしまう。

同じ神に導かれた二つの分野

しかし、そうした現状を知っているからこそ、私は、科学とキリスト教に「和解の福音」を語らずにはいられないのである。

それというのも、エピファニーによって、これまで隠されていた重大事項が、明らかにされたからだ。すなわち、キリスト教と科学とは、実は、同じ神によって導かれていた、ということがである。

もちろんキリスト教は、私という「再臨のキリスト」に向かって、神により導かれていた。グノーシス主義や錬金術、そして、そこからユングに至る流れがあり、またノストラダムスをアンカーとする、ユダヤ - キリスト教の予言体系があった。

そして科学のほうも、キリストの再臨を公にする「GW170817」という重力波観測に向かって、それに至るための理論と技術とを、神から啓示されていたのである。

コペルニクス、ケプラー、ニュートン、アインシュタインに、革新的な霊感を授けていたのは、まさにこの神だった。また、多くの天文学者たちの “真実追及” の情熱に、つねに新しい火と油とを注いでいたのも、この神だったのだ。

要するに、キリスト教と科学は、「キリストの再臨」という目的を実現するために、それと知らないまま “共働” していたのである。

間欠泉のように

このことを教えられていない人間たちは、哀れにも、キリスト教と科学のあいだに「不和と憎しみの種」ばかりを見いだしてきた。そして、無理解が互いを攻撃させ、争乱を生みだし、両者がもつれ合う、悲惨な「宗教と科学の暗黒史」を形づくってしまった。

しかし、その暗い歴史の地下深くでは、いつも神の計画が――宗教と科学による二重螺旋のような――「隠れ水脈」を保たせていたのだ。

そして地下水、あるいは伏流水と呼ぶべきその水脈が、ついに地上に向けて「隠し続けていた水」を噴き上げたのである。2017 年 8 月 17 日に、もちろん、あの「GW170817」として。まるで間欠泉のように。

だから、キリスト教と科学の争いは、もう終わってよいのだ。その日が訪れたのだ。私たちの目の前に「GW170817」「エピファニー」というゴールが現れたのだ。

時代はもう、次のパラダイム（ 枠組み ）に入ったのである。これからは、科学と宗教とは「それと知らないまま」ではなく、日の光のもとで共働する時代に入る。むしろ私たちは、既にそうした “新時代” に移入（ パラダイムシフト ）してしまっているのだ。

偶然のうちに潜む神

科学者たちよ、今なお君たちは、疑いの眼差しを、私に向けるだろうか。

もちろん、今回のエピファニーを、従来の科学の言葉で表現すれば「単なる偶然」にしかならない。無神論的な科学、あるいは、因果性に貫かれた科学は、それ以外の表現語彙を持っていない。

しかし、共時性に対して開かれている心ならば、この「単なる偶然」を「意味のある偶然」として捉えることが出来る。そしてその心は、かかる「意味のある偶然」の中に、偉大なる神の姿をも、垣間見ることが出来るはずなのである。

科学者たちよ、そこにこそ、君たちの今後の生き筋はあるのだ。つまり、偶然のなかに神を見、偶然性のなかに神意を読みとることが、科学者にとっての「神との共存」になっていくのである。

この路線を歩むならば、かの「進化論」でさえ、宗教的な温もりの中で「神意を織り交ぜながら」論じることが出来るだろう。誕生当初からキリスト教から忌み嫌われてい

る、かの「進化論」でさえ、である。

　というのも、進化論者というものは、その進化の道筋のなかに、いくつもの「偶然にも、このような変化が起きた」という文章を挿入するからである。とくに、京都大学の木村資生氏が唱えた「中立進化論」では、

「人間のような種の出現は『博打で百万回、立て続けに勝ちまくったのと同じぐらい』幸運な偶然がなければ成立しない」

　とまで言っているのである。

　そこまで極論せずとも、進化の過程は、ありとあらゆる「幸運な偶然」や「意味深い偶然」に彩られている。宇宙の誕生、宇宙の曲率、太陽系の誕生、生命の発生、細胞の成立、多細胞生物への進展など、みなそうだ。

　まことに、私たちの世界、私たちの宇宙、私たちの歴史は、あまりにも人類に都合のよい形での “偶然” に彩られすぎている。そして従来の科学者たちは、これらの偶然を、偶然のままで捨て置いてしまう。

科学者が神を持つ

　しかし「再臨のキリストのエピファニー」のうちに「意味ある偶然の一致」を見た科学者ならば、もう、そのようにはしないはずだ。

　そうした科学者にとっては “偶然” のうちに「神の意図」を認めることは、もはや少しも難しいことではない。宇宙創世記、生物進化、あるいは歴史上の様々な “偶然” のうちに、である。そしてそれは「科学者が神を持つ」ということに他ならない。

　そう、神は偶然のうちに住まうのである。もう少し慎重に言えば「必然と感じずにはいられない偶然」のうちに潜んでいるのが「神意」なのである。それこそが、科学者が崇めるべき神性なのである。

　このことを明確にするためにも、再臨のキリストのエピファニーは、共時性という「意味ある偶然の一致」という形式のなかで示された。私はそのように思っている。

　きっとこれからは、科学が “神意とともに” 論じられるだろう。

　そのなかでも、神をもつ科学者が説く「進化論」は、きっと驚くべきスマートさと、温もりとを獲得するだろう。それは「自然選択説が徹底された進化論」の、あの寒々とした雰囲気からは、はるか遠くへと決別するだろう。

　もともと私は、進化論を「人類にとって必須の理論」として評価してもいる。それは現在から過去を創始（ 遡流 ）させる、アルベドの姿に似ているからだ。

　つまり進化論の、理論としての素性はいいのである。したがって、そこに神意と宗教性が込められたならば、それは名花のように馥郁たる理論ともなるだろう。

科学の宗教性と宿命

　いや、進化論ばかりではない。すでに私は、量子論や超弦理論などの中にも、神意の

潜在を嗅ぎ取っている。

本書では、ユングとアインシュタインとのつながりから、自然と「相対性理論」を取り上げる機会が多かった。だが私は、実際には、科学理論の全般のうちに、神意の臨在を感じ取っているのである。

もちろん私だって、大量殺戮兵器や、環境破壊につながる、科学の “暗黒面” については認識している。科学が進歩しなければ、こんなものは生まれなかったのに、とも思う。

だがその忸怩たる思いは、かつて異端審問や、魔女狩りを行った、キリスト教に対する感情と、そう変わるものではない。私は「キリスト教がなかったら、あんな陰惨な歴史は生まれなかったのに」とも思うからである。

結局、この三次元空間では、物も思いも、すべては「明暗を伴った立体」として発現するものなのだ。立体が、光だけで構成されることは決してない、ということである。それがこの三次元（ ＝立体 ）世界の宿命なのである。

かかる「つねに物事は明暗を伴う」という宿命のなかで、それでもなお、なるべく光の面に多く関わろうとすること。それだけが、人間に許されている努力の限度なのである。

したがって人間には、つねに「闇に翻弄される道」もまた開かれている。それは嫌でも認めなければならないことだ。原子爆弾も生物兵器も、宗教戦争も異端撲滅も、そうした闇が育んだ、苦くて酸っぱい、まことに味の悪い果実なのである。

祝福の眼差し

そうした重いくびきを認めた上で、私はもう一度「科学への福音」を説こう。

科学者たちよ聴きなさい。あなた方たちは気づかなかっただろうが、神はずっと、科学の進歩を導いてきたのである。そしてこの神は、キリスト教の神でもある。

再臨のキリストもまた、科学を愛する。科学は、人の子の朋友である。

こうした事実が無かったならば “今回のような形では” エピファニーは成就されなかっただろう。それはまさに「科学と宗教の和声」であったからだ。

真実、神の助力が科学史を進展させ、その進展の頂点で、神は「GW170817」という果実を実らせたのである。これはまさに、神と人（ 科学者たち ）が共同で栽培した果実である。そうでなければ、再臨のキリストが、その果実を、こうもすんなりと摘み取ったりは出来なかったはずなのだ。

科学と宗教、そのどちらにも、神は祝福の眼差しを注がれている。これが再臨のキリストによる「科学への福音」である。

第 11 章　有神の宇宙

（ 1 ）客観性を得た共時性現象

神なくば無きこと

私は再臨のキリストである。キリストとは、神と人間をつなぐ者である。人間の神化を説き、神の人間化を説く者である。そして私は、第一から第七までの福音書によって、確かに、この理を説き述べたのだった。

このような私の福音に呼応するかのように「神」が現れた。黄金の創造という形で、創造神が「物質的な神」として、その姿を現わしたのである。

そして、この神が、人間としての私と「つながり」を持った。GW170817 というコード（ 略号 ）によって。

GW170817 の「グラヴィテーション・ウェーブ（ GW ）」の直後に置かれた「17」は、2017 年のことである。この年は、ダニエルによって、キリストの再臨が予言された年だった。

次の「08」は 8 月のことである。ただし、単なる 8 月だとは言いたくない。それはノストラダムスが、オーガストとは呼ばず、あえて「オクトーブル」と呼んで「8」という数値を強調した「8 月」のことである。

この 8 は、ゲマトリアにおいて「イエスと救い」を表す数値である。と同時に、私はノストラダムスが「大転換の始まり」を予言した「73 年の 8 月」に生まれている。

そして GW170817 の最後にくる「17」は、17 日のことである。この 17 日は、私とイエスが共有する、誕生日の数値である。また、聖母マリアの奇跡が聖化してくれた、1973 年 8 月 17 日の「17」である。

こうした、あらゆるニュアンスを押し込めながら、2017 年 8 月 17 日は「再臨のキリストである正道のコード」となる。

そしてこの日に、神の顕現である黄金の光（ キロノヴァ ）の光は到来し、重力波として地球を震わせたのである。あまつさえ「GW170817」という “紛れようもない名前” を付けられて。

かくして神と人間、黄金と正道は、星の仲立ちによる「つながり」を持った。換言すれば、神と正道は、GW170817 によって「キリスト」を形成したのである。もう一度言うが、キリストとは、神と人間をつなぐ者である。

この共時性現象を前にして

まことに、黄金（ 神 ）と正道は、重力波がもつ「170817」という数値、同一のコードによって「意味ある偶然の一致」を現した。

この精緻すぎるほどの共時性現象を前にして、人々は何を思うのだろう。もちろん私に、それについて答える資格はない。だから、答えを出す代わりに「共時性とは何か (序説第 2 章)」から、いくつかの文章を抜粋したい。

――私が発見したものは、あまりにも意味深く結びついているために、それが「偶然」一緒に起こったとは、とても信じられないような「偶然の一致」である。
そうした事実に出くわすと、我々は、正確には自分が何を語っているのか分からないのに「これは単なる偶然であるはずがない」と言いたくなる。

〔そのような〕共時性は、これまで我々には閉ざされてきた「人間の運命の本性に関連する、教えの扉」を開くマスターキーとなり得る。
これは極めて宗教的なことである。多くの例において、宗教の歴史は「明らかに因果律を超えていて、それでもなお現実的であるような出来事」に基づいているからである。

宇宙と人間は、根本において、共通の法則に従うものである。
また人間は小宇宙でもある。よって、堅固な壁によって、大宇宙から隔てられている訳ではない。同じ法則がこの両者を支配している。そのため、一方の状態から、他方の状態へ通じる通路が開いているのだ。
つまり心と宇宙は、内なる世界と、外なる世界のように、関係しあっている。したがって人間は、本来あらゆる宇宙的事象に参与し、外面的のみならず、内面的にも、宇宙に織り込まれているのである。

〔ことに〕狭く定義された共時性は、神的事象と、それに対応する物理的状況が、ともに生じることを意味するのである。
そのときの、人格内で体験された「神の認識」から導かれる、物理的状況との関係は“一致の状態” として、最もうまく記述される。
これは、ミクロコスモスと、マクロコスモスとの一致である。なぜならその時、ある調和が達成され、個人は、宇宙との「対等な結合」をなしたからである。

（ ２ ）神の計画の実現

宇宙全体に浸透する神

ここで改めて、マタイの終末予言を見てみよう。

――星は空から落ち、天体は揺り動かされる。そのとき、人の子の徴が天に現れる――

星が発した振動（ 重力波 ）が地球に届いたとき、当然、地球という天体自体も揺り動かされた。そのとき天には黄金（ 神 ）の光が輝いていた。

これが、天に現れた「人の子の徴」である。なぜなら「170817」というコードによって、神と正道はつながり、キリスト（ 神と人をつなぐ者 ）となったからだ。そして、イエス・キリストの自己名称こそが「人の子」である。

これほど綿密な「神の計画の実現」を目にしても、人々は「この世に神など存在しない」などと信じることが出来るのだろうか。

それは、あまりに難しいことなのではないだろうか、と私は思う。

いまや、どうしても認めざるを得ない事実として「神の臨在」が屹立する。そう、神は、宇宙全体に浸透しているのだ。宇宙のすべてが、神にとっての手足なのである。

「この世界は、一つの存在者であり、目に見える神である。その中では、万物がそもそもの初めから、ひとつの生きた有機体の各器官のように、自然にまとまっている。それゆえ宇宙と人間は、根本において、共通の法則に従うものである（ ユング - 序説より ）」

それが神の在り方であり、人の在り方である。

そして神は、時として「小宇宙としての人間」に、人間に分かる言葉によって「宇宙と人間」の道理を説かせる。それがキリストの役割であり、今回はここに、正道という「キリストの具体例」が現れたのである。

循環論法かもしれないが、これは、どう考えても「神的宇宙なくば、あり得ないこと」である。つまり「神が浸透している宇宙なくば、あり得ないこと」である。

今回の共時性現象は、そのような世界が “舞台” であるからこそ、実現しえた「神の演出」なのである。

迷える「単なる偶然」

前章で述べたように、科学の言葉でなら、今回のエピファニーを「単なる偶然」という形で説明づけることができる。無神論的科学、唯物論的科学ならば、そのように「科学的に片づけること」が、自己の重要使命ですらあるだろう。

しかし、ここまで本書を読んできて、一人の人間として誰が、自信をもって「これら全てが、単なる偶然に過ぎない」と言い切ることが出来るだろうか。

むろん、そのように口にすることは可能だ。また、そのように思い込むのも可能であろう。

しかし、実際にそのようにしたとき、彼の中には、すぐさま「けれども、果たして、本当にそうだろうか？」という迷いが生じるのではないだろうか。

そうならざるを得ないと思う。「単なる偶然」という言葉で安心立命を得るには、この“偶然”は、あまりにも整い過ぎており、あまりにも巧妙に出来すぎている。

事実、統計的に考えてみれば、ここには絶対的な不自然さがある。

ノストラダムスの予言（ 73 年 8 月 ）から始まり、マリアの奇跡による 37 や 61 の算出。4 月 16 日のクリスマス・イブ。ダニエルによるメシア予言の 2017 年。そして何より、重力波の「170817」という数値――

ここには、前後に一つズレただけで、何の意味もなさなくなる数値が、連続して並んでいる。また、もしも第五福音書を紐解くならば、数値は伴わずとも、こうした「偶然の一致」は、さらに数をいや増すことだろう。

ことに注目すべきは、キロノヴァを伴った中性子星合体が、2022 年現在に至っても、まだ GW170817 の一例しか観測されていないことだ。

2019 年に観測された中性子星合体、GW190425 は、合体後すぐにブラックホール化してしまい、キロノヴァ現象そのものを呑み込んでしまった。それだけに、キロノヴァを伴った GW170817 の希少価値は、否応なしに高まることになる。

確率の限界を超えて

となれば、これはもう確率云々のレベルの話ではない。つまり、私にまつわる数値は、確率で測って良しとすべき領域を、遥かに超越してしまっているのだ。確率を求めるとは、数多く打てば当たるものの、その当たり具合を測ることだからである。

それに対して、私が現した共時性現象は、言わば「唯一無二の的を、ピンポイントで正確に射貫いているようなもの」だと評することができる。よって私の、再臨のキリストの共時性現象は、次に掲げる想定範囲を、ずっと下方に見下ろして輝いているのである。「もちろん、偶然の一致は、どれも『まぐれ当たり』だとする考え方もあるだろう。一般的にも『偶然の一致は、べつに非因果的な解釈など、必要としていない』と仮定されている。

この仮定は、それら『偶然の一致』の生起が、確率の限界を超えていない場合は、もちろん真実である。しかし万一、それが『確率の限界を超えている』という証拠があったならばどうだろう（ ユング - 序説より ）」

ここは有神の世界である

私たちの前に現れたのは、まさに確率で測るべき範囲を超えた “確実な数値” を伴った共時性現象であり、「エピファニー」である。

それは黄金なる神の公たる現れであり、神と人をつなぐキリストの降臨である。このファクト（ 事実 ）は、明らかにフィクション（ 人間が想像しうる虚構 ）を超出している。

こうなれば、もはや説明的な言葉は、要らないのかもしれない。もうすでに読者には「感じ取るべきこと」が伝わっているのかもしれない。ここには確かに「客観性を獲得するまでに、高められた共時性現象」があるからだ。

だから、まことの「再臨のキリスト」として、私は今こそ言おう。

「人々よ、気がついただろう。自分たちが、無神の世界などではなく、紛れもない “有神の世界” に生きていることを。神がおわす世界に、自分たちが住んでいるということを。

私はまさに、この真実を顕すために降臨した、救世主なのである。私は “有神の宇宙” を取り戻すために現れた、キリストなのである」

このように書いて私は、ふと『ヨハネの黙示録』の次のくだりを思い出した。

――わたし〔ヨハネ〕は、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。

そのとき、わたしは王座から語りかける大きな声を聞いた。

「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである（ 第 21 章 ）」――

新しいエルサレム

ヨハネが幻視した、上述のような世界。それが、いま本当に現れたのである。神でもあり、人間でもあるキリスト。そのキリストが、神と人間が共に住む「有神の宇宙」を、明確に今、人々に提示したのである。

余談かもしれないが、何となれば、ヨハネが言うがごとく、私が生まれた茨城という場所を「新しいエルサレム」に準えることも簡単だ。

試みに、かの「城塞都市エルサレム」を想起してほしい。城塞都市とは、城壁で囲まれたつくりの都市を言うが、かつてのエルサレムは、まさにこの城塞都市だった。

そこで、ユダに裏切られたイエスは、ユダヤ人指導者たちによる、不当な裁判を受けた。そうして有罪の判決を下されたイエスは、兵士たちから「茨の王冠」をかぶせられることになる。そうして、彼らから「ユダヤの王」として揶揄されたのである。

茨城という土地の名前は、この日のことを思い出させる。すなわち「王として茨の冠を戴いたイエス・キリスト」ならびに「その彼を擁した、城塞都市エルサレム」を想起させるのである。

しかし、再臨のキリストが「栄光のキリスト」であるように、新しいエルサレムである茨城もまた、エピファニーの余光によって着飾っている。それこそ、夫（ 神 ）のため

に着飾った花嫁のように。そこはもう、悲しみの都市ではなく、聖なる “栄光の都市” となっているのである。

そして、そこで告知された福音こそ「神と人がともに生きる有神の世界」の現出に他ならなかった。旧世界、すなわち無神論の世界は、エピファニー（ 神の公現 ）の神威によって吹き飛ばされて、どこかへと過ぎ去ってしまった。

そう、まさしく「最初のものは過ぎ去った」のである。黙示録のヨハネもそのように言っている。

そしてまた確かに、私たちはこれまで——最初の状態として——ずっぷりと無神論の世界に生きていたのである。

第 12 章　幸福なマルス

（ １ ）忍び寄る無神論

ロシア - ソ連の復讐

どうして私たちは「最初の状態として」有神の世界を見失ってしまったのだろう。どうして、ああも見事に、神なき世界を信じるようになったのだろう。

日本に限定して語るならば、その端緒となったのは、おそらく「日露戦争における勝利」であった。

明治の時代、日本という国を存続させるためには、日本人はどうしても、このロシアとの戦争に、勝たなければならなかった。そして、多くの犠牲を払った上で、現実に日本軍は、日露戦争での勝利を収めたのだった。

しかし、この戦争における日本の勝利は、当然ロシアの敗北を意味した。

この敗北は、ロシアという無敗の大国の膝についた、はじめての “土” である。ナポレオンに勝利したロシア、ビスマルクが戦いを避けたロシア。その「強国ロシア」にとって初めての、しかも余りにも屈辱的な敗北だった。

なにせ、負かされた相手は、極東で近代化をし始めたばかりの、小さな小さな島国に過ぎなかったのだ。この事実は、大国ロシアのプライドを、たいそう傷つけた。それは私たち日本人自身にも、たやすく想像がつくことである。

そして、日露戦争での敗北を誘引したロマノフ王朝は、1917 年に、ロシア革命によって倒壊させられることになる。ロシアは、共産主義国家である「ソビエト連邦」として生まれ変わったのだった。

それから 28 年後、日露戦争の勝利者だった日本が、今度は、第二次世界大戦の、敗戦国となる日がやってくる。そして、このときソ連（ ソビエト連邦 ）は戦勝国側にいた。しかも、かかるソ連を率いていたのは、あの残忍無比なスターリンだった。

スターリンは、積年の国民感情（ 怨念 ）を背負いつつ、この時ぞとばかりに、日本への報復を決意する。といっても、その報復は表立ったものではない。ソ連はアメリカのように、がっぷりよつで日本と戦った訳ではないからだ。

内部からの食い荒らし

では、その「表立たない報復」とは何だろう。

それは言わば「内部からの食い荒らし」である。すなわちスターリンは、まずは日本の防衛力を “内部から” 弱体化させようとしたのだ。そのあとならば、ソ連は楽々と日本を侵略することが出来る。

それどころか、日本人全体がソ連のシンパ（ 信徒 ）となれば、日本人は無抵抗のままに、自国を宗主国（ ソ連 ）に差し出してくれるかもしれない。それはソ連にとっては、自国民の血を流させない「パーフェクトゲームとしての、日本への勝利」に他ならなかった。

この勝利のためにスターリンは、じつに巧妙な戦術を用いた。

まず前提として言っておくべきことは、当時の日本にも、すでに多くの共産主義者が存在していたことである。そして当然、彼らの心は「共産主義というイデオロギー」によって、ソ連という国と固く結ばれていた。

そこでスターリンは、彼らを、自分たちの都合どおりに働いてくれる「思想的傀儡」として用いることを考えたのである。

すなわちスターリンは、彼ら日本人共産主義者を “オピニオン・リーダー” に仕立てて、日本人への啓蒙活動を始めたのだ。もちろん、ここで言う啓蒙とは、使嗾、そそのかしと同じ意味を持っている。

かかるオピニオン・リーダー（ 世論形成者 ）による大衆啓蒙。これこそが、いわゆる「反日的日本人」「進歩的文化人」によるメディア活動である。

このさまを歴史的、俯瞰的に眺めるならば「ロシアの復讐心と、ソ連の共産主義が合流した思潮が、日本の内部で流出しはじめた」と形容してもよいだろう。

テーゼと反日的日本人

さて、使嗾的啓蒙を使命とする「反日的日本人」には、モスクワで創設されたコミンテルン（ 国際共産党 ）から、何通ものテーゼが与えられていた。テーゼとは、要するに、コミンテルンの活動指針が書かれた文書のことである。

このテーゼは、そのまま反日的日本人の “聖典” になっていく。そして、その中でも、最もスターリンの影響力が強かったのが「32 年テーゼ」と呼ばれる文書だった。

――この六十数年間（ 1996 年当時 ）、我が国の左翼人、戦後の進歩的文化人、そして現代の反日的日本人、彼らが書きちらした近代日本についての “批判” は、すべて「三十二年テーゼ」が支持した方向を忠実に守っています。

いろいろ手のこんだ理屈を並べてはいても、「三十二年テーゼ」をはみだした例はありません。彼らはひとり残らず「三十二年テーゼ」の “奴隷” だったのです――

谷沢永一『悪魔の思想』より

反日的日本人は、この「32 年テーゼ」を、まさに無批判で受容した。それは彼らにとって、かかるテーゼが、本質的には「宗教的聖典」だったからである。

事実「宗教的情熱をもって」「狂信性をもって」反日的日本人たちは、32 年テーゼに書かれたとおりの、メディア活動を行っていった。

それは結局「反日的日本人」というものが、ソ連とテーゼを本尊に戴く、従順なる宗

教的信者に他ならなかったからである。たとえ彼らが、表向きでは「宗教の否定」つまり「無神論」を標榜していようともだ。

（ ２ ）無神論の危険性

共産主義がもたらしたもの

反日的日本人にとっては、当然テーゼに則った考え方が「文化的で進歩的で正しいこと」ということになる。そして、その内容の根底にあるのは、もちろん共産主義的な考えだ。それは端的に言って、唯物論であり、無神論であり、無霊魂説である。

これを、やや詳しく言い換えれば、次のようなものになるだろう。

・自分たちを「死んだら無となる存在」と規定する考え。
・自分たちが「神なき世界に生きている」とする世界観。
・霊魂と霊界の実在を信じる人たちを「非科学的」と言って侮蔑する姿勢。

これらの “教義” は、総じて、それを受け入れた人々を、どこまでも弱くするオピニオン（ 意見、思想 ）である。

まず、死んだら何も無くなるのなら、その理論的帰結として「この世界で何をやっても、結果はすべて同じ」ということになる。死後、結局すべては無に帰すのだからである。

このような考えは、人間の倫理的な弱体化を、呼び起さずにはおかない。それは自然と、人の心を「自分が生きているかぎりは、自分にとって都合のいいことだけを、行っていればよい」という結論に行き着かせるからだ。

何をやっても死ねば同じ

なにしろ、死んだら何もなくなるのである。であれば、やさしさが生むものも、労りが育むものも、努力を払ったものも、すべては「無」に結実してしまう。何をするにしても、「無」が、彼の行動や努力に対する、絶対の “対価” となるのである。

私はここで、かつて第六福音書で紹介した言葉を、もう一度お見せせずにはいられない。

――心理学者は無気力になる理由を、一つは努力しても報われないとき無気力になる。もう一つは何もしなくても報われるとやはり無気力になる。この二つが無気力の根拠だと心理学的に説明します――

加藤寛、渡部昇一共著『所得税一律革命』より

そう、すべての報いは “無” であり、この世で何をやっても、結果はすべて同じなのである。そして、そうであれば、人はどうしても、無気力にならざるを得ないのだ。彼が苦労して行うことの全ては「無」駄なことにしかならないからだ。

だったら人間は、そんな苦労は忘れ切って、身近な「自分の快さ」だけを追及しなければ嘘になるだろう。そうしないかぎり、唯物論者の生き方としては不合理になる。

歯止めのない犯罪性

そして同時に、上述のような考え方が「自分のためならば、他人が傷つこうが構わない」という思想の温床となることは、言うを俟たないだろう。そして、この思想が人間の行動として現れたものが、一般に「犯罪」と呼ばれるものなのである。

そのようになるのは、他人が死んだとしても、他人を殺したとしても、その他人（ 死人 ）が享受するのが、結局のところ、ほかの誰とも変わらない “無” であるからである。つまり、誰がどんな生き方をしようとも、誰がどんな死に方をしようとも、それが無に行き着く点では、いっさい何の変哲もないのである。

ならば、他人に何をしようと、犯罪者が、罪悪感を感じる必要など微塵もない。彼らにとって、犯罪は良いことではないだろうが、悪いことでもない。なにせその結果は、つねに同じ “無” なのだから。

まったく、いやまったく、正と邪の最終的な行き先に、一切の差異がないとは、唯物論とは、何とまあ画期的な思想であることだろう。

しかもである。その犯罪の形態は、彼らの場合「歯止めの効かない残忍さ」「常軌を逸した猟奇性」を伴わずにはおかれない。つまり彼らの犯罪は、犯罪者としての “新しい刺激” を求めて、どこまでも漸強的に、クレッシェンド的に、恐ろしいものとならざるを得ないのだ。

それというのも、何をやっても “無” に結実する「無意味な人生」に、唯一意味を持たせるものがあるとすれば、それは “生きているうちの快楽” だからである。

そして「より新しい刺激」というものは、快楽という概念の、中枢的な位置を占めている。それゆえ、残忍はさらなる “新しい残忍” を呼び、猟奇はさらなる “新しい猟奇” を呼び込むことになるのだ。

有神論が抑制する、残酷と猟奇

このような残酷さ、猟奇性を抑制するものがあるとすれば、それは「死後にも霊魂が残る」という思想。そして「自分がその霊魂として、神（ 審判者 ）と対峙する」という予感だけだろう。

なぜというに、そのように「神が存在していて、死後にその神からの裁きがある」と考えればだ。人間はそのとき、自身の犯罪的行動に、何らかの抑制を設けずにはいられないからである。

まことにそうである。そのとき人間は、自分の快楽（ 残酷、猟奇 ）を求める心に、制限を加えずにはいられない。神がいると考えれば、当然そこには「裁かれることへの恐怖心」が加味されることになるからだ。

そして、この恐怖心が、彼に自制心を授けることになる。

人間誰だって、神さまに裁かれたり、地獄に落ちるのは怖いのである。キリスト教も仏教も、かなり生々しい地獄の景色を伝えている。それは後世の人々を怯えさせるのに、十分な効力を持っていたと言えるだろう。

よって「神は、その裁きによって、人をかかる地獄に落とす権限を持っている」とそのように思えばである。その帰結として人は、残酷的にも、猟奇的にも、なりきれない。

つまり、根本のところで、悪や罪と切り離せない “人間” であってもだ。そんな人間であっても、有神論によって、その悪や罪の「内容」や「程度」を、抑制的に変化させることだけは、出来うるのである。少なくとも「微かにそれらを軽減させること」ぐらいは出来るのである。

有神論による罪悪の歯止め——もしかしたらこれだけが、人間にとっての、倫理的福音なのかもしれない。原罪（ ＝虚無 ）によって「悪を犯さずにはいられない存在」となってしまった人間にとっては。

しかし無神論は、有神論による倫理的な歯止めの一切を、奪い去ってしまう。神という概念を除去すれば、当然そのようになる。というのも、神なき世界には「最終的に、公平に、人間の悪を裁く者」が、もはや誰もいなくなってしまうからである。

そのため無神論が及ぶところでは、犯罪は “無邪気に” どんどん凶悪化していく。どんどん残酷になり、どんどん猟奇的になっていく。そうして、その凶悪化のぶんだけ、人間社会を、より強い不安に陥れることになるのである。

私など「無神論というものは、本当にマイナスの価値しかない思想だな」と思ってしまう。実際、己の寂しさと不幸に酔いしれる「ナルシシズム効果」以外、無神論に何か積極的な価値があるのだろうか。

霊魂不滅説

ところで、死後の裁きを成立させるためには、どうしても明確に「死後にも生き続ける、人間の霊魂」を前提にしなければならなくなる。つまり「霊魂不滅説」である。

けれども、この教説ほど、反日的日本人の嘲弄をまねく話題もないのだ。

ためしに彼らに向かって「死んでも霊は残るのだ」などと言えばどうなるか。進歩的な彼らは、当然のように、文化人として嘲笑うだろう。そうして「それは原始的な考えだ」「それはアミニズム（ 原始宗教 ）だ」と言い返してくるに違いない。

けれども、進歩性に富んだ彼らが、人倫の面で作り出したものとは何だったか。これまで見てきたように、それらはすべて、悪質で無用なガラクタに過ぎなかったではないか。

まことに反日的日本人という木が、倫理的な “良き実” を結んだ試しはないのである。彼らの言う進歩は、私からすれば明白な退歩でしかない。未だに進歩的であることを誇っている彼らに、私たちは、そのことを気づかせてやらなくてはならない。

日本人の民度の低下

いずれにしても、こうした「反日的日本人」による啓蒙は、ものの見事に日本国民全体に浸透していった。

おかげで多くの日本人からは、人を愛する気持ちと、犯罪を憎む気持ちとが、ごっそりと奪われてしまった。第二次世界大戦以前には確かにあった、日本人の偉大性や矜持もまた、根こそぎ奪われてしまった。

むろん、こうした精神性は、著しい道徳的廃頽を生み、国民の民度を著しく貶めることになる。かくして日本人は、そのほとんどが「神を信じないこと」「霊を信じないこと」を誇るような、卑小な人間の集団となってしまった。

換言すれば、日本人のほとんどが「神を感じる瞬間を微塵も持たない、つまらない人生しか送れない人間」へと、なり下がってしまったのである。つまり国民全体が「自分の神的価値を見いだせない人間」の集まりになってしまったのだ。

スターリンの勝利

こうした国民は、国家防衛の点で、まことに脆弱である。まず、自分の善的価値を知らない者が、自分たちのために戦うはずがない。それに、神や霊魂を知らない者は、痛みや死を恐れずに、命を賭して戦う術もまた知らない。

だから、もし今の日本人がもう一度日露戦争を戦ったとしたら、間違いなく大のつく惨敗を喫することだろう。むしろ、ロシアという宗主国に、進んで日本の国土を、献上してしまうかもしれない。

もっとも、共産主義の不合理によって、ソビエト連邦は、とっくの昔に自壊してしまってはいる。それは誰もが知る、歴史的な事実ではあろう。

だがそうであったとしても、スターリンの日本に対する復讐は、共産主義を用いることによって、ものの見事に成就してしまったのである。日本という国が、こんなにも情けない、無神論の国になってしまったのだから、である。

上述のように、すでにソ連は崩壊し、かのロシアの地には「ロシア正教」という名の、キリスト教が戻ってきた。しかし、この世界には、いまだ「中国共産党」という、共産党と無神論の牙城が残っている。この中国の “衛星国家としての日本” も、今なお健在である。

そう、日本にいる反日的日本人（ 共産主義者 ）にとっては、ソ連、中国共産党、そして北朝鮮が、心の故郷だったのだ。とすれば、ソ連が消えたところで、彼らの故郷が、すべて無くなってしまった訳ではないのである。

（ 3 ）聖戦の呼びかけ

無神の 100 年が過ぎ去る

1917 年に起こったロシア革命は、共産主義国ソビエト連邦を生みだした。それは「無神の時代」「神不在の時代」の始まりを告げる狼煙だった。

しかし、それからちょうど 100 年後、救世主降臨が予言されていた 2017 年に、かの星は輝いたのである。黄金を通して「創造神を万人に知らしめる光」として。

何のためにか？　無神論の荒れ地から、有神論の沃野を復活させるためにである。人と神が、ともに生きる時代を現出させるためにである。

そう、新しいエルサレムは、ついに天から下ってきたのだ。古いものは過ぎ去ったのである。だから私たちは、有神論によって、愛の心を復活させなければならない。人を愛するために「無神論は間違いである」と、声を大にして叫ばなければならない。

この宇宙が、無神論を許容することなどあり得ない。反対に宇宙は、徹底的に「自分の体躯に、神の意志が浸透していること」を主張するに違いない。そして宇宙は、その証拠として、2017 年 8 月 17 日の「エピファニー」を差し出したのかもしれない。

宇宙の意志を声に

しかし、残念ながら宇宙は、人の言葉を持たない。だから宇宙は「自分と人間をつなぐ者」としてのキリストを、人類に与えたもうたのである。それこそが私なのであり、だからこそ、私の思想と、宇宙的な事象が呼応するような事も起こったのである。

よって私は、宇宙の意志として、今こそ次のように言い切ろう。

「私たちは、間違いなく “神がおわす世界” に生きている。神の心は愛であり、私たちは神の一部分である。これは私たちが抱く、全ての愛の前提である。

神は永遠という時間を具現化している。それが、死後にも生き続ける、私たちの霊魂の存在基盤である。私たちは死後もなお生きて、生前の “報い” を受ける。

まことに神は、人が死ぬと、彼の霊魂に “公平な裁き” を与えたまう。すなわち、より『他者のために、自分を捧げた人間』は天国に招き入れられ、より『自分のために、他者を利用した人間』は地獄に落とされるのである。

私たちが生きているのは、そのような有神の世界である。そして私たちには、そのような世界に生きる者としての、倫理観が求められているのだ。

聖戦が始まる

あなたが日本人ならば、まずは反日的日本人たちの使嗾（ そそのかし ）から、目覚めることから始めようではないか。

今や反日的日本人は、中国共産党の傀儡となっている。そして彼らの唯物論、無神論、無霊魂説は、ソ連が宗主国だった時代と同様に、日本人の心を日々蝕んでいる。

日本人は、その誤った思想を、自分たちの心から駆逐しなくてはならない。

それは一種の「聖戦」が始まるということである。キリストの再臨を認める者ならば、当然参加すべき聖戦が、である。

もしかしたら、この「聖戦」という言葉に、アレルギーを感じる人もいるかもしれない。

もちろん私も、宗教戦争の悲惨さについては、重々承知している。かつてはイスラム教徒が「ジハード」と呼び、キリスト教徒が「グエッラ・サンタ」と呼んだ聖戦。それがいわゆる「暗黒の中世」を、まさにどす黒い暗色で染めている。

それは、自分たちの神以外には “神” を認めない、一神教同士の争いだった。どちらも神を持ちながら、互いの神を「悪魔」と罵り合った末の、不毛とすら言える諍いだった。その戦いが残したものは、いつ果てるとも知らない、憎しみの連鎖だけだった。

そこには僅かに「異文化交流」の側面もある。だが正面向きから見れば、そこにあるのは、陰惨な戦争史でしかない。それが宗教戦争の、真っ暗な “負” の部分である。

神と無神の戦い

しかし、いま私が呼びかけている聖戦は、如上の聖戦とは全く性質が異なっている。今回戦うのは、二つの有神論陣営（ キリスト教徒とイスラム教徒 ）ではないからである。

今回戦うのは、有神論と無神論なのである。有神の世界と、無神の世界（ 共産主義・反日的日本人 ）の戦いなのである。

こうした場合、私たちには、相手の神を捏ねくって「悪しき神」「悪魔」を仕立て上げる必要がない。それも当然で、無神論を奉じている陣営に「神」がいるはずもないからだ。

ただし、無神論が、悪魔たちの「隠れ蓑」になることは、あり得る。

悪魔は、自らの存在を明かさない。自分たちが霊的存在であることを教えない。自分たちが存在し得るという論理を作らせない。というのは、さすがに「実在感がある悪魔の言うこと」を進んで聞く人間は、そうそういないからだ。

つまり悪魔が、正直に悪魔を名乗ってしまったら、そのとき彼らは、実質的に「人間たちを、思いのままに動かすこと」が出来なくなってしまうのだ。

だから悪魔たちは、自分たちの姿を隠すための、分厚いマントを必要とする。そして、そのニーズに見事に合致するのが、かの「唯物論」「無神論」「無霊魂説」なのである。

悪しき霊である彼らは、それらの「霊などいない」という啓蒙によって、人間から「どこにも存在しないもの」として扱ってもらえることになる。そして悪魔たちは、かかる「無詮索」「無捜索」の背後にあって、気ままに「悪しき霊としての自由」を謳歌するのである。

けれども、無神論を掲げる者たちが、結局は悪魔の所業を行うところに、彼らの隠れ蓑の綻びが生じてしまう。

この綻びは、どんなに分厚いマントでも、貫通してしまう虫食い穴である。

たとえば、スターリンも毛沢東も、その生涯を眺めれば、明らかに「悪魔としての一面」を隠しきれていない。悪魔でなくて、どうしてあれほど残酷な殺戮や、人命の軽視が出来るものか、と。

その点で言えば、有神論と無神論の戦いは「神の陣営と、悪魔の陣営との戦い」でもあろう。それは『死海文書』が予言した「光の子らと、闇の子らの最終戦争」に似ていなくもない。

幸福なマルス

予言と言えば、私はここで、ノストラダムスによる、あの有名な予言を思い出さずにはいられない。

――1999 年 7 の月、恐怖の大王が空から降ってくるだろう。

アンゴルモアの大王を蘇らせるため、その前後の期間、マルスは幸福の名のもとに支配するだろう――

この予言詩を私が解けば、次のようになる。

「17 のとき（ 2017 年 ）再臨のキリストが『↓』のベクトルに乗って降臨することだろう。その目的は、父神を助けるため。すなわち、再誕の釈尊を蘇らせるためである」

ここまでは、解釈がスムーズに進む。しかし、少々不可解だったのが、四行目。「その前後の期間、マルスは幸福の名のもとに支配するだろう」の行である。

もともとマルスは、ローマ神話に登場する「戦いの神」である。したがって私は、その神の幸福とは「世が戦乱に満ち溢れること」だと思っていた。そして実際、現代の世界は、戦乱に満ち溢れているように見える。

とはいえマルスは、腐っても「神」である。その神であるマルスが「互いに絶対の正義を持ち合わせていない、人間同士の戦い」を眺めて、これを幸福と感じるものなのだろうか。私にとって不可解だったのは、この点に他ならない。

しかし、今ならば、その疑問を解くことが出来る。

というのも、マルスは、いまや聖戦の名のもとに、無神論との戦いに臨むことが出来るからだ。すなわち戦神である彼は、その神性を、心置きなく「意義ある戦い」に用いることが出来るのである。

このような戦いならば、マルスは神として、素直に是認することが出来る。この有神論を確立するための戦いを、心から祝福することが出来る。これこそが「幸福なマルス」の実態ではなかろうか。

ならば戦士たちよ、エピファニーにより、自分たちがすでに神の国に住んでいることを知覚した人々よ。いざ戦いに臨まん。有神の世界を広げる戦いに臨まん。無神論に奪われて欠けた、神の国の領土を取り戻すために。

再臨のキリストによる福音書　8-Ⅲ

著　者　　正道

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社